

塩部遺跡

2009

株式会社カワチ薬品
甲府市教育委員会

塩 部 遺 跡

—店舗建設に伴う発掘調査報告書—



2009

株式会社カワチ薬品
甲府市教育委員会

序

全国各地で地域の歴史や伝行事、さらには自然・景観をも取り上げ、積極的にその活用が講じられつつあります。地域にとってそれらがいかに重要であるか、あらためて実感するとともに、その保存・保護が現代に生きるものの大なる責務であると再認識いたします。

本書は、店舗建設に先立ち実施した『塩部遺跡』の発掘調査報告書であります。本遺跡は、市街西部に位置し、かつて豊かな水田地帯が広がっていましたが、近年一帯は宅地・商業化し、往時の景観から大きく様変わりしております。周辺には貴重な文化遺産が点在し、本調査に際しても弥生時代以来、古墳・平安時代に至る人々の生活の痕跡が確認され、連綿と続いてきた歴史の一端が明らかとなりました。

歴史あるこの地域で、今回、発掘調査が行われたことは誠に意義深く貴重なものであります。本書が学術研究深化への一助になるとともに、教育資料へも活用され、郷土の歴史と文化を再認識する機会となればこの上ない喜びであります。

末筆となりましたが、この度の記録保存に際し、貴重な歴史遺産に対する深いご理解を賜り、ご支援・ご協力を頂いた株式会社カワチ薬品及び関係各位に、感謝申し上げるとともに、衷心より厚くお礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

甲府市教育委員会

教育長 奥 田 理

例　　言

1. 本書は山梨県甲府市飯田一丁目 2249-1, 2288 における塙部遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は店舗建設に伴うものであり、開発主体者 株式会社カワチ薬品との協議を経て発掘調査に係る委託契約を締結し、甲府市教育委員会が主体となって実施した。
3. 本調査から報告書作成に至る経費は開発主体者が負担している。
4. 本遺跡に関する調査は伊藤正彦（文化振興課文化財主事）が担当した。
5. 調査の期間及び面積は以下のとおりであり、本調査終了後に引き続き整理作業に着手し、すべての作業が終了したのは平成 21 年 3 月であった。
調査期間 平成 20 年 9 月 26 日～11 月 7 日 面積 156m²
6. 本書の編集・執筆は、望月秀人（文化振興課長）を責任者とし、伊藤が行った。整理作業に係る遺物洗浄・注記・接合作業、遺物実測・図面作成作業及び挿図・写真図版などの作成は、磯村美佳 須田泰美 高添美智子 滝沢みち子 中村知保 西久保民子 望月典子が行った。
7. 本書に関する出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。
8. 本書に関する基準点測量・基準杭の設定及び写真測量業務は株式会社テクノプランニングに委託した。
9. 発掘調査及び報告書作成に際して次の機関・諸氏からご指導ご協力を賜った。厚くお礼を申し上げる次第である。
山梨県教育委員会学術文化財課（財）山梨文化財研究所 河本工業株式会社 株式会社 NIPPO コーポレーション 関東開発株式会社 有限会社アーバン店舗開発株式会社 峠東測量設計
10. 発掘調査参加者（敬称略）
荒木 昭彦 飯室 恵子 池谷富士子 磯村 美佳 久保田明義 小池 幹子
佐藤美喜男 高添美智子 中村 知保 波木井祥和 古屋袈裟男 松野 達夫
望月 典子

凡　　例

1. 調査地点はかつて、「飯田一丁目遺跡」として調査された経緯があるが（『飯田一丁目遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 6 集 1985 年）、『甲府市遺跡地図』（平成 4 年）発行以後、「塙部遺跡」として周知している。
2. 本書に掲載した遺構番号は、調査現場において付けたものである。
3. 遺構名は各遺構の形状・検出状況に応じて調査現場において付けたものである。
4. 全体図、遺構・遺物実測図の縮尺は図中に表示した通りである。
5. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示している。
6. 報告書中の方位は磁北を示している。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次
挿図・表目次

第 1 章 調査概要

第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 試掘調査結果	1
第 3 節 調査の方法と経過	3

第 2 章 遺跡環境

第 1 節 立地と地理的環境	4
第 2 節 歴史的環境	6

第 3 章 遺構と遺物

第 1 節 壴穴住居址	10
第 2 節 溝状遺構	33
第 3 節 埋甕遺構	37
第 4 節 土坑	38
第 5 節 遺構外出土遺物	38

第 4 章まとめ	39
----------------	----

挿 図 目 次

図1	試掘地点及び「飯田一丁目遺跡」調査範囲	2
図2	試掘坑2~3出土遺物	2
図3	遺跡周辺の微地形分析図	4
図4	遺跡の位置	5
図5	塙部遺跡と周辺の遺跡	7
図6	甲府市全図(大正10年)	8
図7	塙部遺跡全体図	9
図8	1号住実測図・遺物出土状況	11
図9	1号住出土遺物	12
図10	2号住出土遺物	12
図11	2号住実測図・遺物出土状況	13
図12	3号住実測図・遺物出土状況	15
図13	3号住カマド実測図	16
図14	3号住カマド遺物出土状況	17
図15	3号住出土遺物(1)	18
図16	3号住出土遺物(2)	19
図17	4号住出土遺物	20
図18	4号住実測図	20
図19	5号住遺物出土状況・カマド実測図	21
図20	5号住実測図・遺物出土状況	22
図21	5号住出土遺物	23
図22	6号住実測図・出土状況(1)	26
図23	6号住遺物出土状況(2)	27
図24	6号住出土遺物	28
図25	7号住実測図・遺物出土状況	29
図26	7号住出土遺物	30
図27	8号住実測図	32
図28	8号住出土遺物	32
図29	1号溝実測図	33
図30	1号溝出土遺物	34
図31	2号溝実測図	35
図32	2号溝出土遺物	36
図33	埋甕検出状況	37
図34	埋甕出土遺物	37
図35	土坑出土遺物	38
図36	土坑実測図	38
図37	遭構外出出土遺物	38

図 版 目 次

図版1	1号住出土遺物、2号住出土遺物、3号住出土遺物	43
図版2	3号住出土遺物、4号住出土遺物、5号住出土遺物	44
図版3	5号住出土遺物、6号住出土遺物	45
図版4	6号住出土遺物、7号住出土遺物、8号住出土遺物	46
図版5	埋甕出土遺物、土坑出土遺物、遭構外出出土遺物、試掘坑2出土遺物、試掘坑3出土遺物	47

写真1	試掘状況(試掘坑1)	1
写真2	試掘状況(試掘坑3)	1
写真3	1号住遺物出土状況	10
写真4	2号住完掘状況	13
写真5	3号住完掘状況	14
写真6	カマド遺物出土状況	17
写真7	カマド調査状況	19
写真8	調査状況	19
写真9	4号住遺物出土状況	20
写真10	5号住完掘状況	24
写真11	遺物出土状況	24
写真12	調査状況	24
写真13	一括遺物出土状況	24
写真14	一括遺物出土状況	24
写真15	調査状況	24
写真16	6号住完掘状況	25
写真17	6号住遺物出土状況	27
写真18	括遺物出土状況	27
写真19	調査状況	27
写真20	調査状況(2)	27
写真21	7号住完掘状況	30
写真22	土層堆積状況	30
写真23	8号住遺物出土状況	31
写真24	調査状況	31
写真25	1号溝土層堆積	33
写真26	1号溝出土遺物	34
写真27	2号溝完掘状況	35
写真28	調査状況	35
写真29	2号溝出土遺物	36
写真30	検出状況	37
写真31	上層堆積状況	38
写真32	調査状況	38

表 目 次

遺物観察表(1)	40
遺物観察表(2)	41
遺物観察表(3)	42

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

塩部遺跡包蔵地内において、文化財保護法に基づき平成20年8月19日付けで株式会社カワチ薬品代表取締役河内伸二より店舗建設に伴い埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これにより市教育委員会は、同年9月4日より試掘調査を実施し、開発予定地内で埋蔵文化財を確認した。調査結果を踏まえた9月9日、工事主体者・施工責任者・市教委の三者で協議を行い、予定されている工事計画では埋蔵文化財を破壊するため保存の措置が必要であること、設計変更等により保存措置を講じるよう要望するとともに、市教委に委託し記録保存を行う場合は、工事主体者に費用負担を求めるなどと説明した。その後数回の協議を経た9月25日、工事主体者と市教委で発掘調査及び報告書作成業務に関する委託契約を締結し、開発に先立ち遺跡に重大な影響を与える範囲156m²を対象に埋蔵文化財の記録保存を行い、地域の歴史を伝える資料として保存・活用することとした。

平成20年9月26日 文化財保護法第99条第1項の規定に基づき埋蔵文化財発掘の報告を山梨県教育委員会教育長に提出する。

平成20年11月14日 遺失物法第13条の規定に基づき埋蔵物の発見届を甲府警察署長に提出する。

第2節 試掘調査結果（図1、2、図版5）

すでに昭和59年、山梨県教育委員会が開発に伴い対象地の北側約300m²を発掘調査している。古墳時代を中心に縄文・弥生時代の遺物も出土し、住居址等の存在が推定されていた。当開発計画に際しても遺構・遺物の検出は十分予想されたため詳細な調査データを得る目的で試掘調査を実施した。当該地に幅2~3mの試掘坑を3ヶ所、延べ33mにわたり設定し、重機により表土を除去後、人力で精査・確認を行った。東側に設定した試掘坑1からは、旧建物建設に際しすでに掘削を受けたらしく遺構・遺物とともに確認できなかつた。西側に設定した試掘坑2~3において、地表下1mから遺構・遺物の出土が確認でき、一括性の高い土器集中箇所なども確認した。こうした結果を踏まえ、駐車場として利用されていた西側に遺跡が残存し、依然として良好に埋蔵していると判断した。



写真1 試掘状況（試掘坑1）

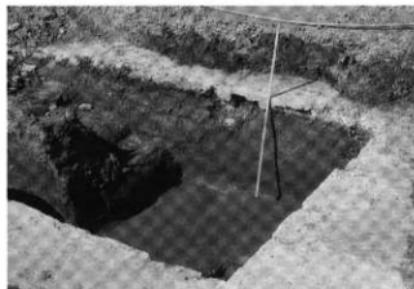


写真2 試掘状況（試掘坑3）

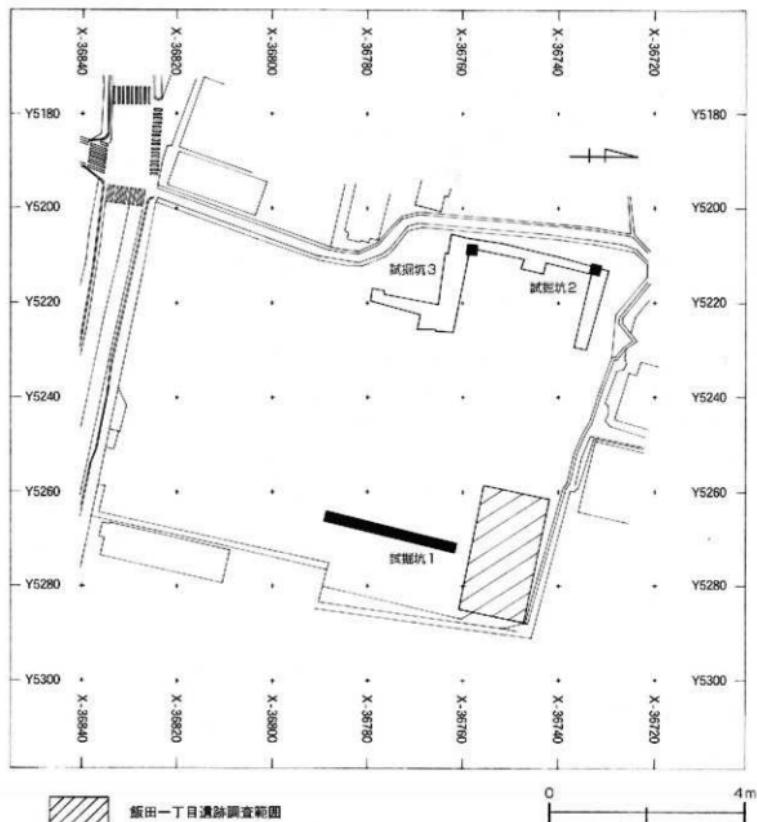


図1 試掘地点及び「飯田一丁目遺跡」調査範囲

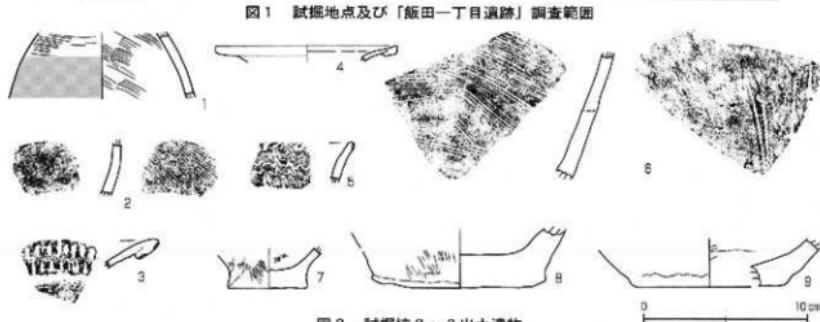


図2 試掘坑2～3出土遺物

第3節 調査の方法と経過

調査は、平成20年9月26日から11月7日まで行った。調査範囲の表上等を重機で除去した後、人力にて遺構・遺物の検出に努めた。遺構検出に際し、規模・形状・重複の有無等を確認するため任意に半裁・トレンチ調査により堆積土層を確認しつつ調査を行った。出土遺物に關し、遺構確認に先立ち出土した一括性が高いものについては原則として出土地点を記録しつつ調査を行ったが、それ以外は一括遺物として扱った。遺構に伴う出土遺物は一括性が高いもの、底面出土のものを記録し、それ以外は各遺構の一括遺物とした。調査・測量の基準として、國土座標に基づく基準点を設置し、遺構の記録は10分の1、もしくは20分の1で測量及び図面作成を行い、全体図は航空写真測量により作成した。記録写真は、遺物の出土状況、遺構の検出状況、土層の堆積状況などを主に撮影した。発掘調査終了後、引き続き整理作業を実施し、出土遺物の洗浄・注記、実測遺物の選定、図化・トレース作業を行った。報告書刊行まですべての業務が完了したのは平成21年3月であった。

<調査日記抄録>

- 9月26日（金）重機にて表土除去、27日まで。
- 9月29日（月）降雨のため機材搬入のみ実施。
- 9月30日（火）精査・遺構確認作業。部分的に擾乱の痕跡を確認する。
- 10月1日（水）遺構確認作業。住居址3～4棟確認。土層の堆積状況を確認する。
- 10月2日（木）遺構確認作業。新たに住居址を2棟確認する。トレンチ調査により遺構の重複関係を確認する。
- 10月3日（金）引き続きトレンチ調査により遺構の重複関係を確認する。1号住及びピット1の平面プランを写真撮影する。
- 10月6日（月）降雨のためポンプにて排水する。調査区内への崩落土を除去する。
- 10月7日（火）排水路掘削、ポンプにて排水。崩落土の除去。精査・遺構確認作業。
- 10月8日（水）降雨のため雨水を排出する。重機にて掛土の移動を行う。
- 10月9日（木）雨水排出。精査・遺構確認作業。1号溝を確認。掘り下げを行う。
- 10月10日（金）埋甕2基確認する。1号溝掘り下げ、湧水により断念。2号溝を確認する。
- 10月14日（火）排水路掘削、ポンプにて排水。
- 10月15日（水）精査・遺構確認作業。1号住、掘り下げを行う。
- 10月16日（木）1号住掘り下げ。7号住の平面プラン確認、掘り下げを行う。
- 10月17日（金）1号住遺物出土状況、写真撮影。2、3号住の平面プランを確認する。
- 10月18日（土）3号住掘り下げ。古墳時代後期の遺物が出土。7号住遺物出土状況、写真撮影。
- 10月20日（月）3号住カマドを半裁、土層堆積を確認する。4号住掘り下げ。
- 10月21日（火）埋甕平面実測。5、6号住の重複関係を確認する。
- 10月22日（水）4～6号住掘り下げ。7号住遺物出土状況・土層堆積を記録する。
- 10月23日（木）24日まで降雨のため作業中止。
- 10月27日（月）5号住遺物出土状況実測。1号溝掘り下げを内開する。
- 10月28日（火）5号住遺物出土状況実測。6～7号住遺物出土状況、写真撮影。
- 10月29日（水）3号住カマド、遺物出土状況実測。4、6号住土層堆積を記録する。
- 10月30日（木）8号住を確認。被熱土が面的に広がる。2号溝確認、掘り下げ作業を実施。
- 10月31日（金）5、6号住出土遺物記録、取り上げを行う。
- 11月1日（土）5号住カマド、拡張して全面検出に努める。8号住・2号溝覆土を掘り下げる。
- 11月3日（月）8号住・2号溝、遺物出土状況実測。3号、5号住カマド平面実測。
- 11月4日（火）5～6号住、記録図面を作成する。航空写真測量を実施する。
- 11月5日（水）出土遺物・機材の搬出を行う。重機にて埋め戻しを始める。（7日まで）

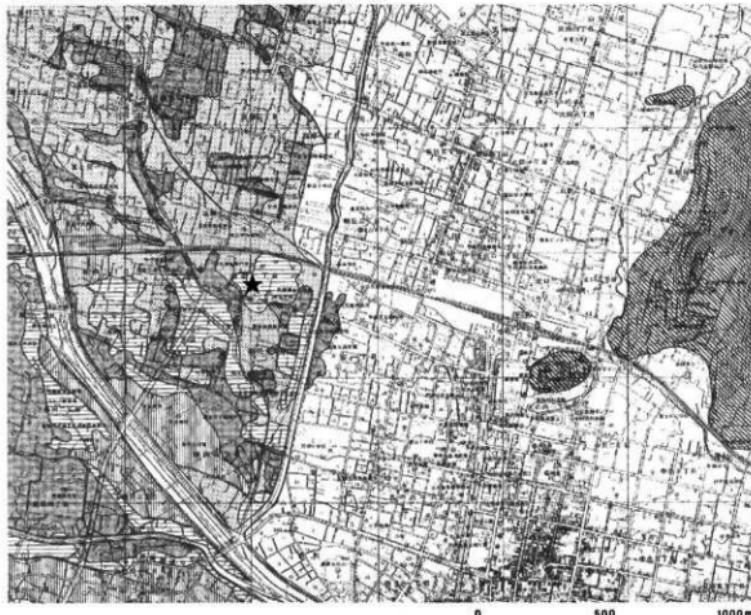
第2章 遺跡環境

第1節 立地と地理的環境（図3.4）

本市は、山梨県のほぼ中央に位置し、南北に細長い市域をなしている。長野県との境、標高2599mを測る金峰山山頂から盆地底部の低平地、標高約250m地点まで幅広い自然を含み、市域の4分の3は山地であり、標高300m未満の低地が4分の1を占めている。本遺跡は甲府盆地の北縁部、相川によって形成された扇状地の扇端部に立地する。相川は、盆地西縁を南流し、荒川と合流した後、さらに盆地内を南流する。遺跡の北側背後に湯村山が迫り、南側前面に盆地低平地が広がる。

微地形分析から度重なる相川・荒川の流路変更により一帯には後背湿地・旧河道の他、自然堤防・扇状地等が埋没しており複雑な地形を形成していたことが判明している。こうした成果から観察すると、調査地点一帯は扇状地地形が張り出し住環境に適した高燥な地であったと推量できる。

調査地は市内飯田一丁目に所在し、標高約275mを測る。弥生時代から平安時代の遺跡として周知され、一帯は宅地化が進んでいる。



丘陵	自然堤防（高位面）
扇状地Ⅰ	自然堤防（低位面）
扇状地Ⅱ	後背湿地・旧河道

図3 遺跡周辺の微地形分析図（『塩部遺跡』山梨埋蔵文化センター 1996年より借載）

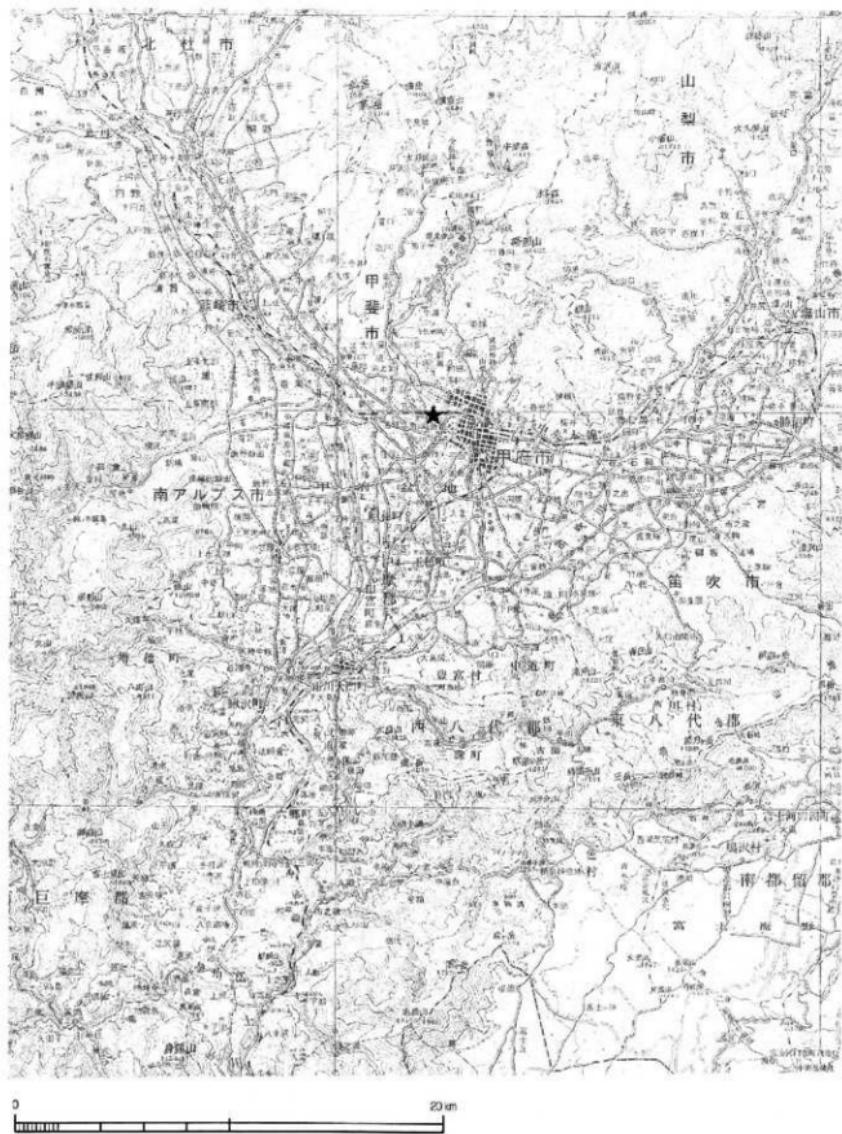


図4 遺跡の位置

第2節 歴史的環境（図5.6）

本遺跡は東西約500m、南北約700mの範囲に広がり、これまで種々開発にともない調査が実施されている。平成7年に実施した県立高校校舎建替工事に伴う調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓11基、弥生時代後期の住居址1棟、奈良・平安時代の住居址8棟のほか、水路・旧河道などを検出している。平成13年～16年にかけて実施した道路改良工事に伴う調査では、弥生時代後期から古墳時代後期にわたり連綿と構築された住居址45棟、掘立柱建物跡27棟の他、古墳時代前期の方形周溝墓を4基発見している。これら遺構とともに多種多様な遺物や畿内・東海・北陸の各地域の影響を色濃く受けた土器が出土するなど各地から物資が集まる拠点的な集落であったと理解されている。

本遺跡以外にも相川・荒川の流路一帯には、多くの遺跡の存在が知られている。特に昭和59年、本遺跡から上流域数kmの相川河床においてナウマンゾウの臼歯化石が発見され、これにより後期旧石器前半まで遡って、人間の営みが推量できることとなる。

当地で人々の足跡が認められるのは縄文時代前期後半からである。榎田遺跡(8)・緑ヶ丘一丁目遺跡(35)・宝町遺跡(45)から該期の土器・石器が検出され、上石田遺跡(46)からは縄文中期の住居址を確認している。他に周知の遺跡として、金塚西遺跡(10)・西大阪A遺跡(13)・音羽遺跡(15)・西河原遺跡(17)・緑ヶ丘二丁目遺跡(34)・宮北遺跡(47)・食料工場遺跡(48)等がある。

弥生時代後半以降、当地の居住・生産域、墓域などがそれぞれ明らかになりつつある。本遺跡のほか、榎田・音羽・青沼遺跡(49)等では平安時代まで連綿と続く集落跡が確認されており、本遺跡と榎田遺跡から古墳時代前期の方形周溝墓が、富士見遺跡(21)からは同時期の水田跡がそれぞれ調査・確認され、平石遺跡(18)より祭祀に関連すると推定される古墳時代後期の溝跡が発見されている。他に弥生～古墳時代にかかる遺跡は、天神北(6)・天神西(7)・跡部(9)・神田(12)・八幡東(22)・三光寺山(36)・向田A遺跡(38)・湯田町遺跡(50)・伊勢町遺跡(51)など多数存在する。

本遺跡から北方、荒川左岸は「千塚」の地名が示すように6世紀中頃から大規模な古墳群が築造されてきた地である。開発によりすでに多くが消滅したようであるが、湯村山山麓から山裾にかけて多数の古墳が現存する(23～30、32)。江戸期より知られた存在だった万寿森古墳(25)は、初期横穴式石室を備え、県内有数の規模を有する。同様に江戸時代より大型墳墓として著名であった加牟那塚古墳(11)は、直徑約45m、高さ約7mを測り、東日本有数の規模を有する円墳であり、盆地西部を拠点とした有力首長の墳墓と推量されている。これらの他、穴塚古墳(16)も荒川流域で現存する数少ない古墳の一つである。

奈良・平安時代の遺跡は、前述した榎田・音羽・青沼遺跡の他、秋山氏館跡(52)・平石遺跡から建物跡が確認されている。周辺には若宮前(3)・天神平(4)・御藏(5)・西大阪B(14)・村之内(37)・八幡東・永井(39)・十二天(40)・南河原A～D(53～56)・村西遺跡(57)など多くの包蔵地が知られている。古墳時代以来当地は、大型墳墓を築造し得る有力氏族が居住する拠点的地域であったと考えられている。

中世鎌倉期、稻積莊・志摩莊・小松莊・塩戸莊などが市域で確認できる。莊城・存続期間など不明確であるが、稻積莊は上石田から南方、盆地低平地が莊城となり、小笠原氏が在地領主と推定されている。志摩莊・小松莊は九条家領であり、武田有義が在地領主と推定されている。志摩莊の莊城は千塚・湯村・荒川以西に比定され、小松莊の莊城は小松から積翠寺にかけた相川中流域に比定される。

戦国期、湯村山山頂に武田氏館(44)の防衛の一翼を担った湯村山城(31)が築造されるほか、館背後の山巒に監視・軍事的機能を帯びた和田の城山(1)・法泉寺山の烽火台(33)・小松山の烽火台(41)・鐘撞堂(43)などの城砦群が構築されていた。



図5 塩部遺跡と周辺の遺跡 (★塩部遺跡 ●縄文～平安 ▲古墳 ■中世城館)

数少ない当該期の調査事例として、秋山氏館跡(52)がある。墓坑23基、茶毘状遺構2基のほか、区画溝・井戸跡・建物跡などを検出している。15世紀を通じ墓域であり、その後、近世の屋敷地へと変化していることが判明した。

江戸時代、調査地一帯は塩部村に含まれたらしく、慶長6年(1601)「北山筋塩部郷御繩打水帳」(『西山梨郡志』)では屋敷数19を数え、文化11年(1814)完成の『甲斐国志』は当村について、戸数20・人数67、高1049石余と記載する。調査地は江戸時代より人家も点在しない耕作地だったらしく大正10年(1921)発行の甲府市全図は相川以西を大きく耕作地と表現している。

本文中及び図5に示した遺跡の内訳は、以下のとおりである。



図6 甲府市全図(大正10年)

- | | | |
|-----------------------|-----------------------|-------------------|
| 1. 和田の城山(中世) | 2. 羽黒山古墳(古墳) | 3. 若宮前遺跡(平安) |
| 4. 天神平遺跡(平安) | 5. 御蔵遺跡(古墳・平安) | 6. 天神北遺跡(古墳・平安) |
| 7. 天神西遺跡(古墳時代) | 8. 櫻田遺跡(縄文前期～平安) | 9. 跡部遺跡(古墳時代) |
| 10. 金塚西遺跡(縄文・古墳) | 11. 加牟那塚古墳(古墳) | 12. 神田遺跡(弥生～平安) |
| 13. 西大阪A遺跡(縄文) | 14. 西大阪B遺跡(平安) | 15. 音羽遺跡(縄文～平安) |
| 16. 穴塚古墳(古墳) | 17. 西河原遺跡(縄文・平安) | 18. 平石遺跡(弥生～平安) |
| 19. 居村村上遺跡(縄文・平安) | 20. 前田遺跡(平安) | 21. 富士見遺跡(古墳～平安) |
| 22. 八幡東遺跡(弥生～古墳) | 23. 大平一号墳(古墳) | 24. 大平二号墳(古墳) |
| 25. 万寿森古墳(古墳) | 26. 湯村山一号墳(古墳) | 27. 湯村山二号墳(古墳) |
| 28. 湯村山三号墳(古墳) | 29. 湯村山四号墳(古墳) | 30. 湯村山五号墳(古墳) |
| 31. 湯村山城(中世) | 32. 湯村山六号墳(古墳) | 33. 法泉寺山の烽火台(中世) |
| 34. 網ヶ丘二丁目遺跡(縄文前期～平安) | 35. 網ヶ丘一丁目遺跡(縄文前期～平安) | 36. 三光寺山遺跡(古墳時代) |
| 37. 村之内遺跡(古墳～平安) | 38. 向田A遺跡(弥生～古墳) | 39. 永井遺跡(古墳～平安) |
| 40. 十二天遺跡(平安) | 41. 小松山の烽火台(中世) | 42. 犹石古墳(古墳) |
| 43. 鐘撞堂(中世) | 44. 武田氏館跡(中世) | 45. 宝町遺跡(縄文・平安) |
| 46. 上石田遺跡(縄文中期) | 47. 宮北遺跡(縄文・平安) | 48. 食料工場遺跡(縄文～弥生) |
| 49. 青沼遺跡(古墳～平安) | 50. 湯田町遺跡(古墳時代) | 51. 伊勢町遺跡(古墳時代) |
| 52. 秋山氏館跡(平安～中世) | 53. 南河原A遺跡(平安) | 54. 南河原B遺跡(平安) |
| 55. 南河原C遺跡(平安) | 56. 南河原D遺跡(平安) | 57. 村西遺跡(縄文・平安) |

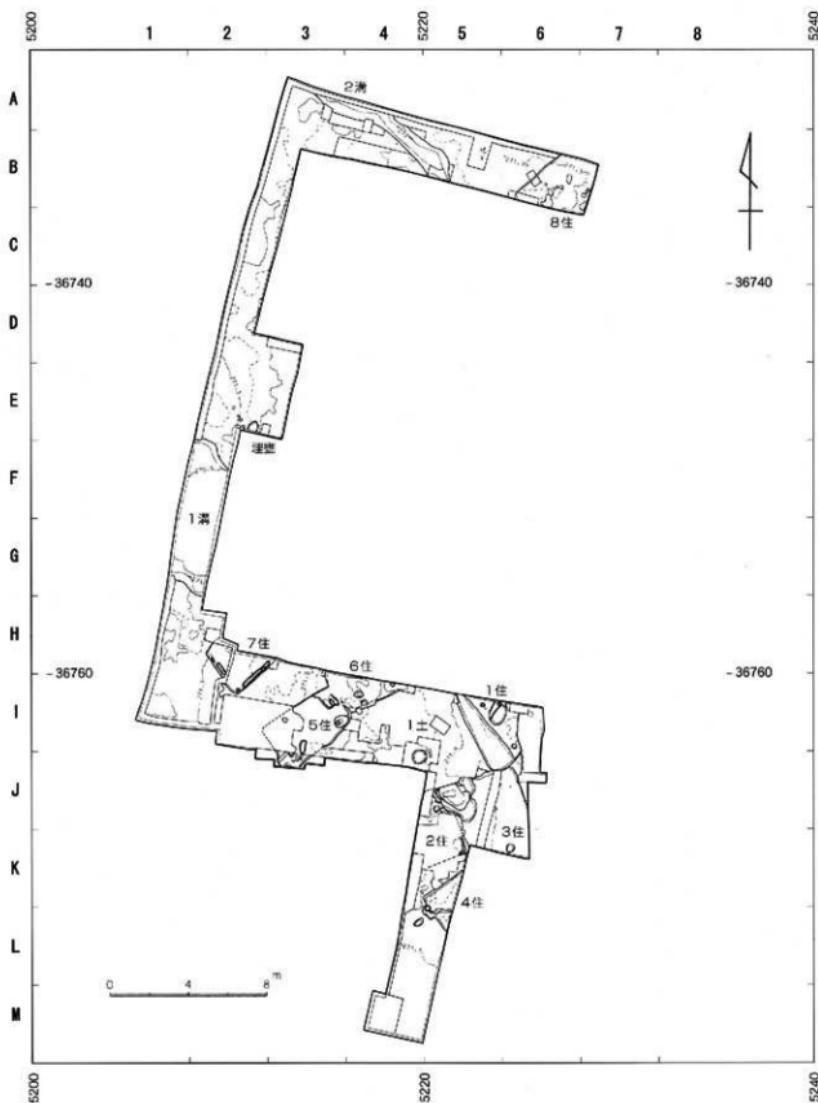


図7 墓部遺跡全体図

第3章 遺構と遺物

遺物とともに竪穴住居址 8 棟、溝状遺構 2 条、埋甕 2 基、土坑 1 基を確認している。検出遺構・出土遺物の大部分が古墳時代後期に属す。

第1節 竪穴住居址

1号住居址（図8.9、図版1）

遺構確認作業に際し遺物集中と黒色土の広がりを検出し、トレーナーを設定して遺構範囲及び掘り込みを確認した。遺構の大半は調査区外に広がりカマドも確認されず、東側は搅乱を受けている。古墳時代後期の住居址である。

（規模・形状）南北方向 4.62 m、東西方向 2.50 m を確認した。隅丸方形を呈し、掘り込みは、住居中央付近が 0.20 m と浅く、西壁にかけて 0.30 m となり、住居隅にかけて掘り込みが深くなるようである。

（覆土）搅乱を受けているため判然としないが、3層からなり、床面近くに炭化粒が多く混入していた。

（遺物出土状況）遺構確認段階で数箇所に集中する状況であった。掘り下げに際し出土した点数は僅かで、単独かつ散在して検出される状況であった。

（内部施設）ピット3基及び西壁際を一段掘り込んだ周溝状の施設を確認した。ピット1は一部調査区外に広がるが、長径 1.20 m、短径 0.85 m、深さ 0.55 m を測る。一段テラス状に掘り残した後、長楕円形の掘り込みがある。ピット2は長径 0.26 m、短径 0.20 m、深さ 0.28 m を測る。ピット3は長径 0.25 m、短径 0.16 m、深さ 0.28 m を測る。ピット出土遺物は小片のみで図化できなかった。周溝状の施設は、幅 0.58 ~ 1.30 m、床面からの深さ 0.14 ~ 0.19 m となり南壁にいたり幅広く、深くなっている。

（出土遺物）住居址周辺からの出土遺物を含め9点を図化した。7の時期が判然としないが、他は古墳時代後期の所産である。1は半球形を呈する壺、2は内湾口縁壺と呼ばれ丸底で口縁部との境に稜を有するもの、3~5、8はハケ整形される甕の破片、9は安山岩産の磨石であろうか、磨面が4面ある。

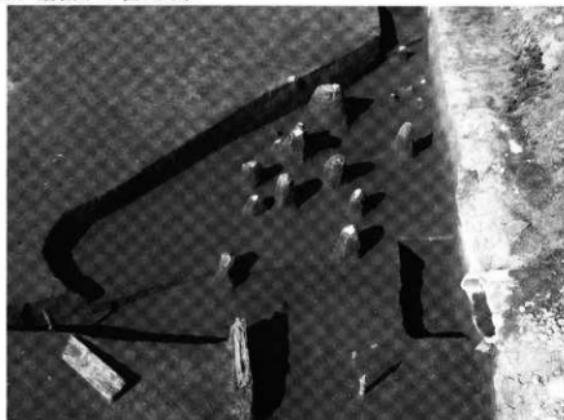


写真3 1号住居址出土状況

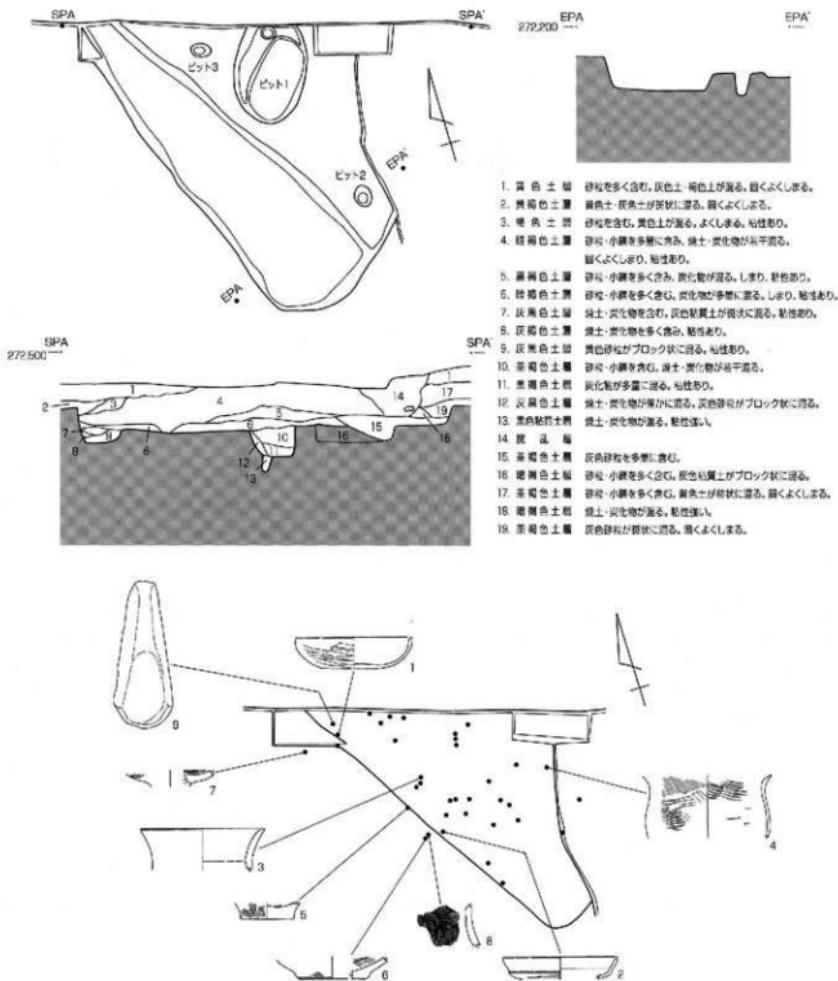


図8 1号住実測図・遺物出土状況

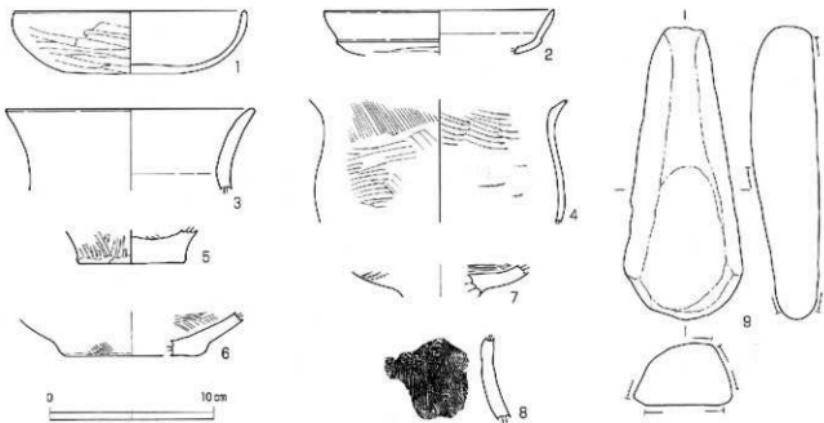


図9 1号住出土遺物

2号住居址 (図10,11、図版2)

トレント調査により掘り込みを確認したものの、遺構の大半は搅乱により削平を受けたらしく多くを確認できなかった。3号住居址と重複し、古墳時代後期の住居址となる。

(規模・形状) 東西方向 3.25 m、南北方向 3.59 m を確認した。隅丸方形を呈し、最も残りが良い箇所で 0.50 m の掘り込みがあった。

(覆土) 搅乱により判然としないが、上層に黄褐色土が斑状に混入し、下層に焼土・炭化物を多く含むようだ。一部床面に焼土が集中する箇所があった。

(遺物出土状況) 駿跡から壺・高壺・甕が集中して検出された以外、破片資料が散在して検出される状況であった。

(内部施設) 幅 0.18 m、深さ 0.08 m 程の周溝を部分的に確認したのみである。

(出土遺物) 1 の丸底半球形を呈する壺は、内面黒色処理され、器面にタールが付着している。2 は脚部の裾が大きく屈曲する高壺で、ヘラ削り、ナデによって仕上げている。3 の鉢はハケ整形後、ナデ調整され、4 は安山岩産の磨石であろうか、磨面が表裏 2 面ある。

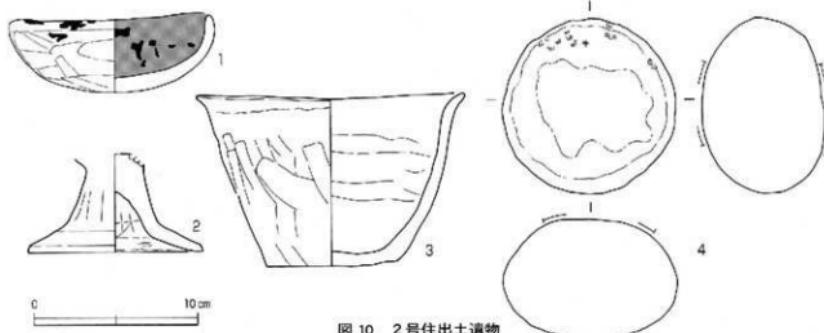


図10 2号住出土遺物

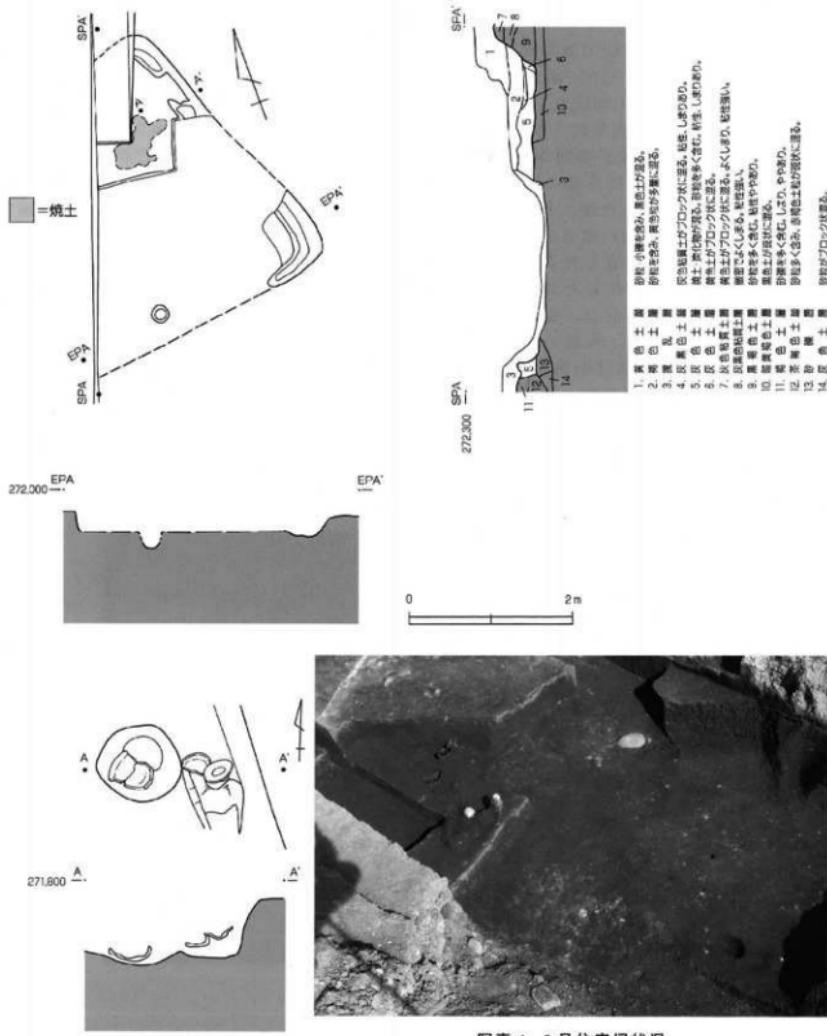


写真4 2号住完掘状況



図11 2号住実測図・遺物出土状況

3号住居址（図12～16、図版1.2）

遺構確認に際し焼土の集中と黒色土の広がりを確認した。西壁は2号住及び搅乱により削平を受けたらしく確認できなかった。古墳時代後期の住居址である。

(規模・形状) 東西4.10m、南北4.60mを確認し、隅丸方形を呈するようだ。

(遺物出土状況) カマド周辺から集中して出土した以外、破片資料が散在して検出された。

(カマド) 挖り込みや構築材・焼土の広がりなどから長軸1.02m、短軸0.71m程の規模となる。径10cm程の小礫が多数集中していたが、袖石・支柱石などは確認できなかった。

(内部施設) カマド脇に長軸2.11m、短軸1.57m、深さ0.15m程の掘り込みがあり、一段テラス状に掘り残した後、長軸1.62m、短軸1.05m、深さ0.57mを測る楕円形の掘り込みがある。器形を窺い知る遺物が多く出土するものの、本住居に附属する施設でなく住居構築以前にすでに存在した遺構であろう。

(出土遺物) 27点を図化したが、前述したように本住居に伴わないものもここに含めて報告する。図15-1～8、15、図16-26、27が本住居に伴う遺物である。1は須恵器坏身の口縁部片、2～5は、丸底で口縁部との境に稜を有し、内湾して立ち上がる坏、6は須恵器坏身を模倣し口縁部が強く内折する坏となる。他に削りにより仕上げられた甕(7)、外面赤彩された高坏(15)、磨石が2点(26、27)出土している。

カマド脇の掘り込みからの出土遺物に坏・高坏・甕・甕・壺がある。坏は丸底で口縁部との境に稜を有し、直立して立ち上がるもの(9～12)、半球形を呈するもの(13)、内湾口縁坏(14)がある。他に長胴形となる甕(19～22)、胴部が球形となる壺(23～25)がある。

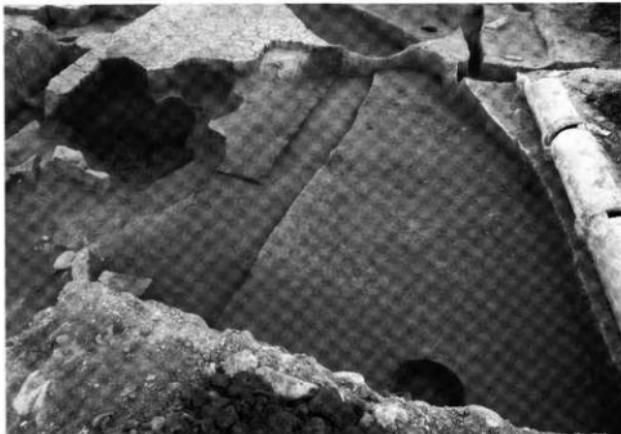


写真5 3号住完掘状況

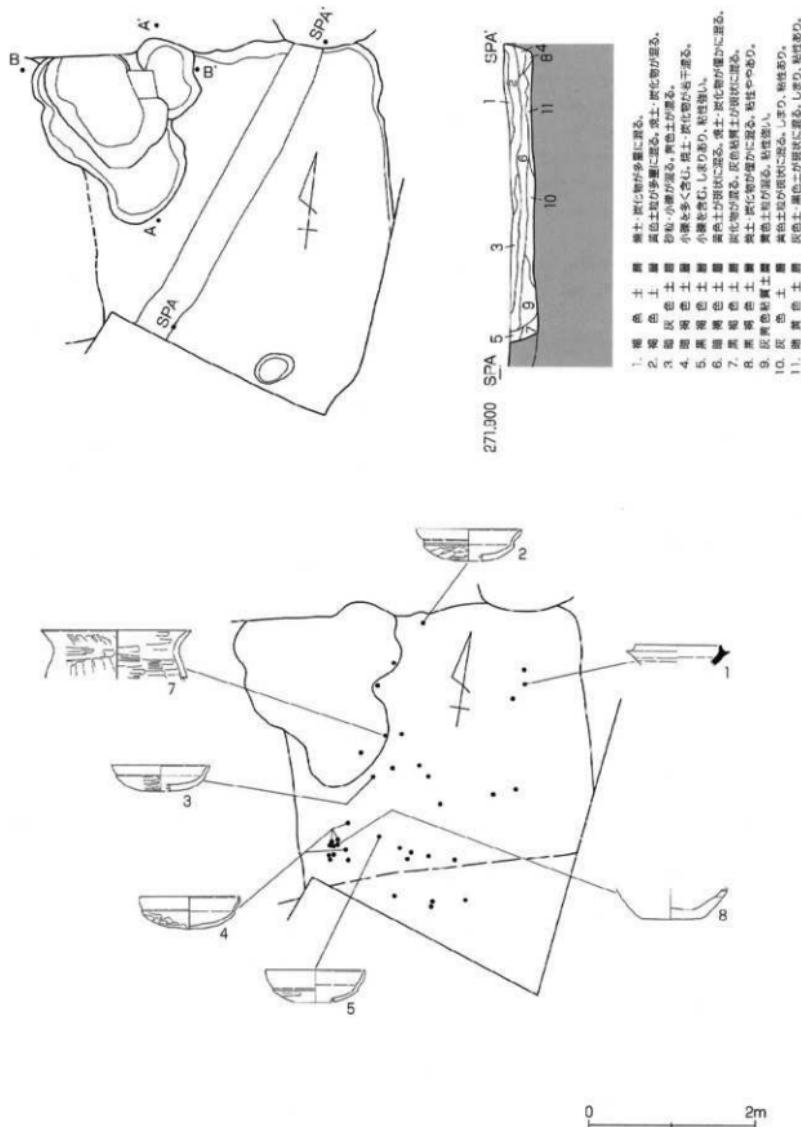


図 12 3号住実測図・遺物出土状況

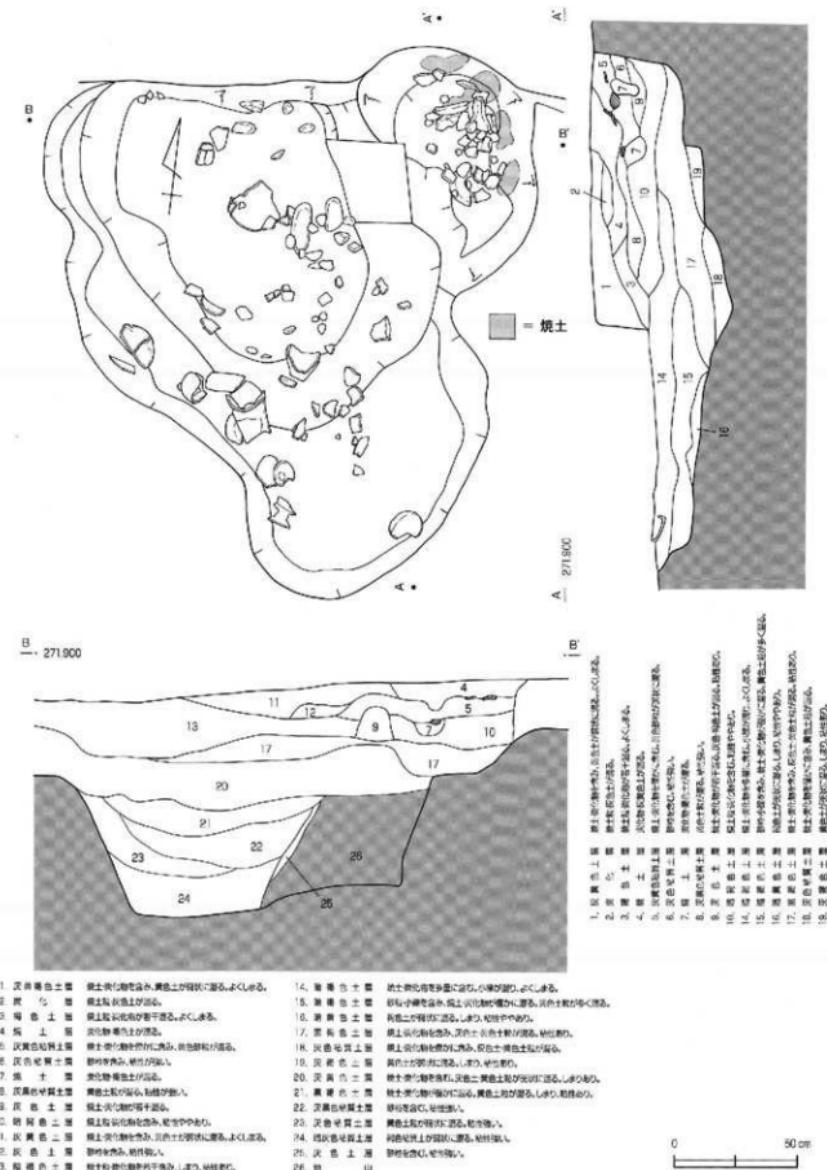


図 13 3号住カマド実測図

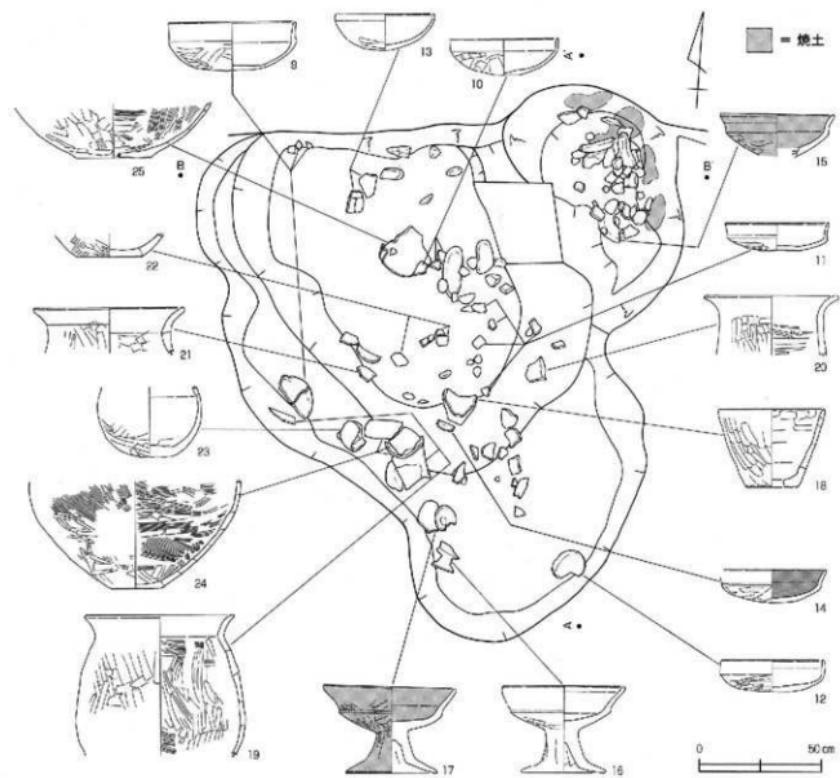


図 14 3号住カマド遺物出土状況



写真 6 カマド遺物出土状況

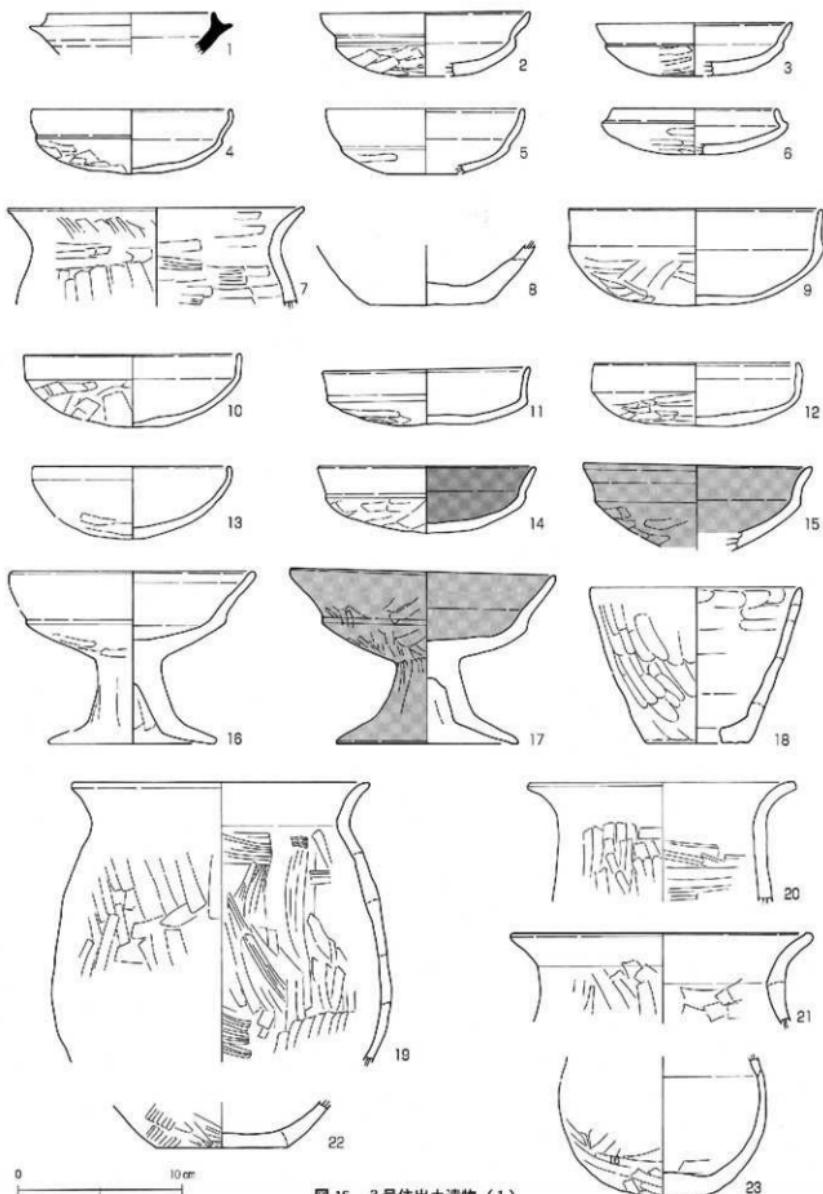


図 15 3号住出土遺物 (1)

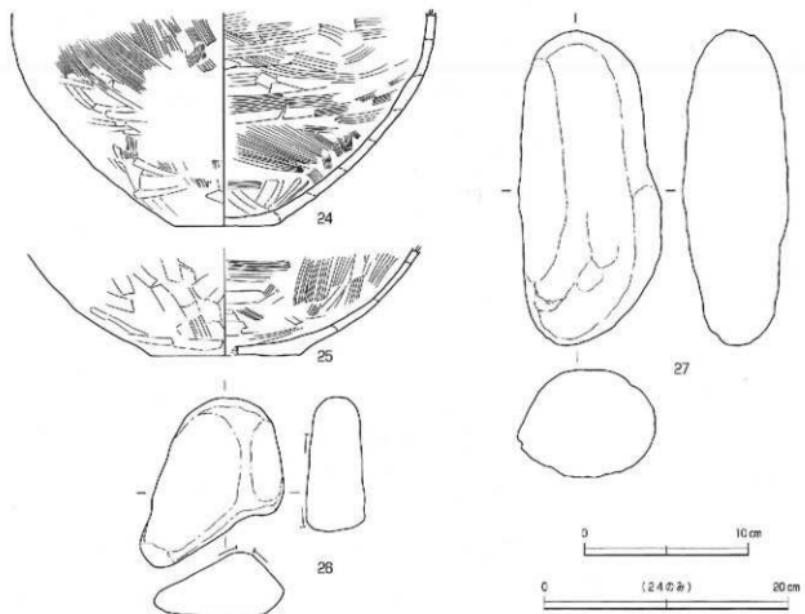


図 16 3号住出土遺物 (2)



写真 7 カマド調査状況



写真 8 調査状況

4号住居址（図17,18、図版2）

遺構確認に際し黒色土の広がりを検出した。西壁から南壁を確認できたにすぎず、遺構の大半は調査区外に広がる。古墳時代後期の住居址であろう。

（規模・形状）南北方向 2.53 m、東西方向 2.20 m を測る。南壁に一部張り出しがみられるが略方形を呈する。

（覆土）レンズ状に埋没した過程が判明する。覆土全体に焼土・炭化物が混入するが、下層に多く混入する状況であった。

（遺物出土状況）細片資料が散在して出土した。

（内部施設）西側床面が低くなるらしく 15cm 程度の比高差がある。南壁張り出し部からピットを 1箇所確認した。平面略円形を呈し、径 0.35 × 0.33 m、深さ 0.25 m を測る。

（出土遺物）2点を図化した。いずれもハケ整形された甕の底部片である。

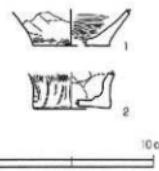


図17 4号住出土遺物

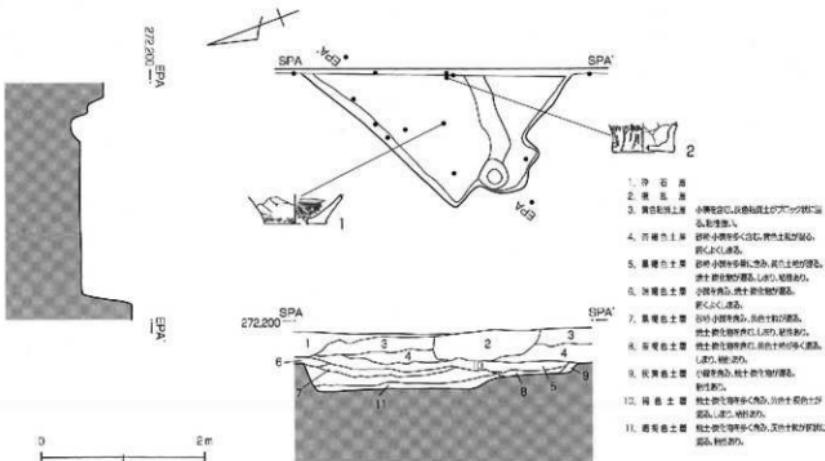


図18 4号住実測図

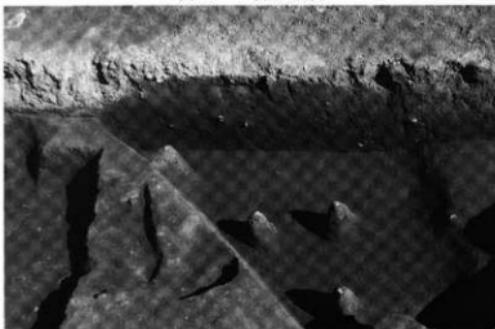


写真9 4号住遺物出土状況

5号住居址（図19～21、図版2.3）

遺構確認に際し黒色土の広がりを検出し、トレンチを設定して遺構範囲及び掘り込みを確認した。一部搅乱を受け、6号住と重複している。古墳時代後期の住居址である。

（規模・形状）長軸4.20m、短軸2.66mを測り、方形を呈する。

（遺物出土状況）カマド周辺から数個体が一括集中して出土するとともに住居址全体から破片資料が多く検出された。

（カマド）住居南壁に焼土の広がりとともに張り出し部を検出した。搅乱を受け、袖石など確認できなかったが、焼土の広がりから長軸0.86m、短軸0.68m程の規模となろう。

（内部施設）ピットを2基確認した。ピット1は長楕円形を呈し、長径0.63m、短径0.32m、深さ0.10mを測る。ピット2は長径0.78m、短径0.55m、深さ0.42mを測る。

（出土遺物）1は須恵器坏身を模倣し口縁部が強く内折する坏、2は丸底で口縁部との境に稜を有し、内湾して立ち上がる坏である。妻は多くが長胴形となるもので、口縁部の屈曲が強く、最大径が胴中位にあるもの(3)、胴下位に最大径があるもの(4)、口縁部が直立し、屈曲が見られないもの(9)などがある。他に胴部が球形となる壺(10)、混入品である古墳時代初頭の器台(11)があった。

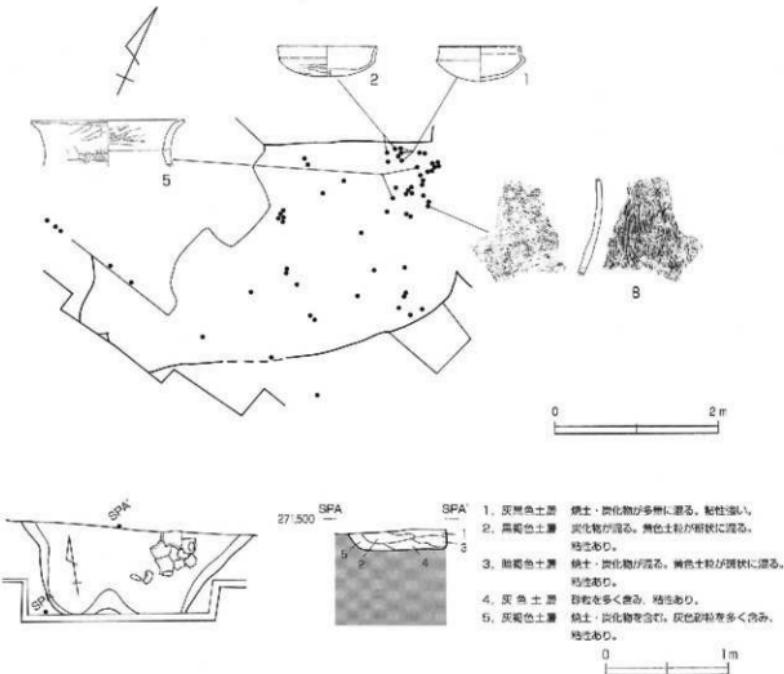


図19 5号住遺物出土状況・カマド実測図

1. 黒褐色土層 砂粒・小礫を含む。粘土・炭化物・黄色土粒が混入。粘性弱い。
2. 黒褐色土層 粘土・炭化物を多量に含む。砂粒・小礫・黄白色土粒が混入。粘性、しまりあり。
3. 反黑色土層 粘土・炭化物を含む。砂粒・小礫が多量に混入する。粘性、しまりあり。
4. 黄色土層 煤土塊が多量に混入。砂粒を含み粘性があり。
5. 黄色土層 煤土塊を多量に含み、黄褐色土粒が混入。
6. 黑褐色土層 煤土・炭化物を含む。下層は灰色粘質土が堆積する。灰色粘質土が層状に混入。
7. 黄色土層 砂粒を多量に含み、黄褐色土粒が混入。
8. 黑褐色土層 黄色土砂粒が切状に混入。粘土・炭化物を若干含む。粘性、しまりあり。

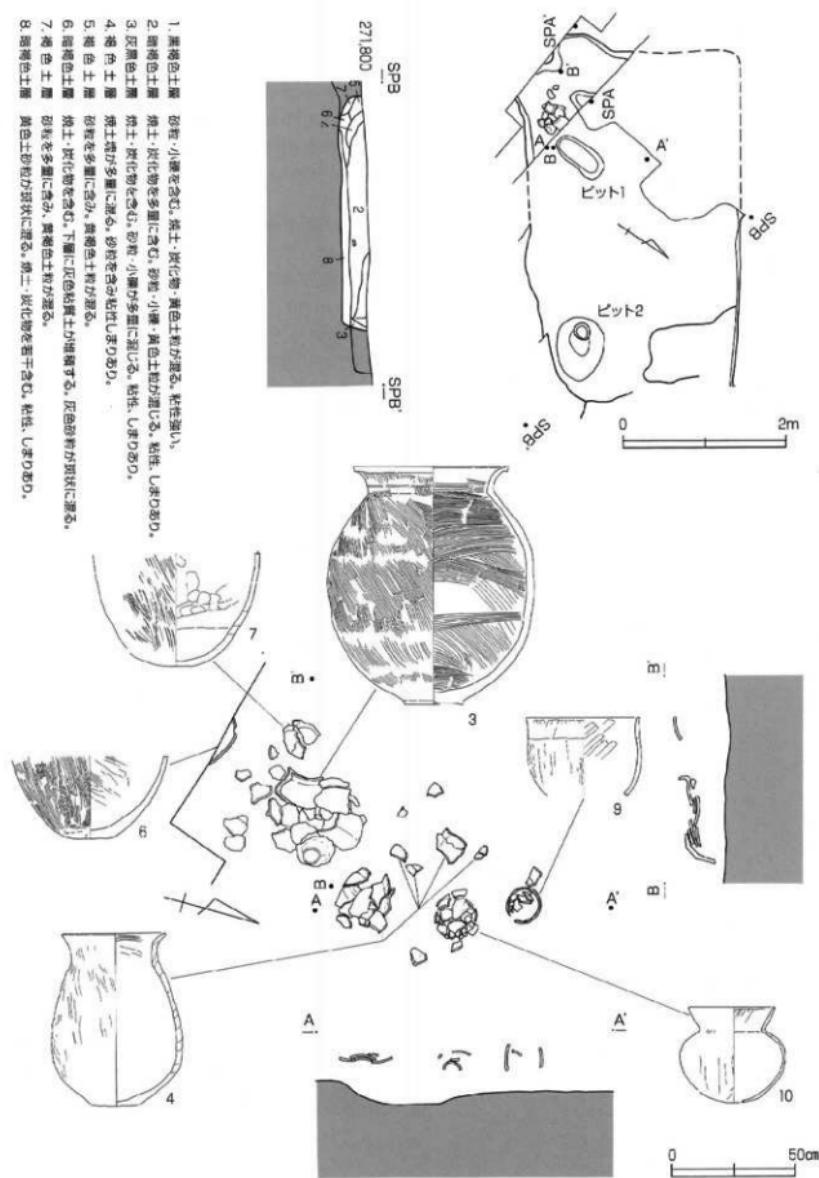


図 20 5号住実測図・遺物出土状況

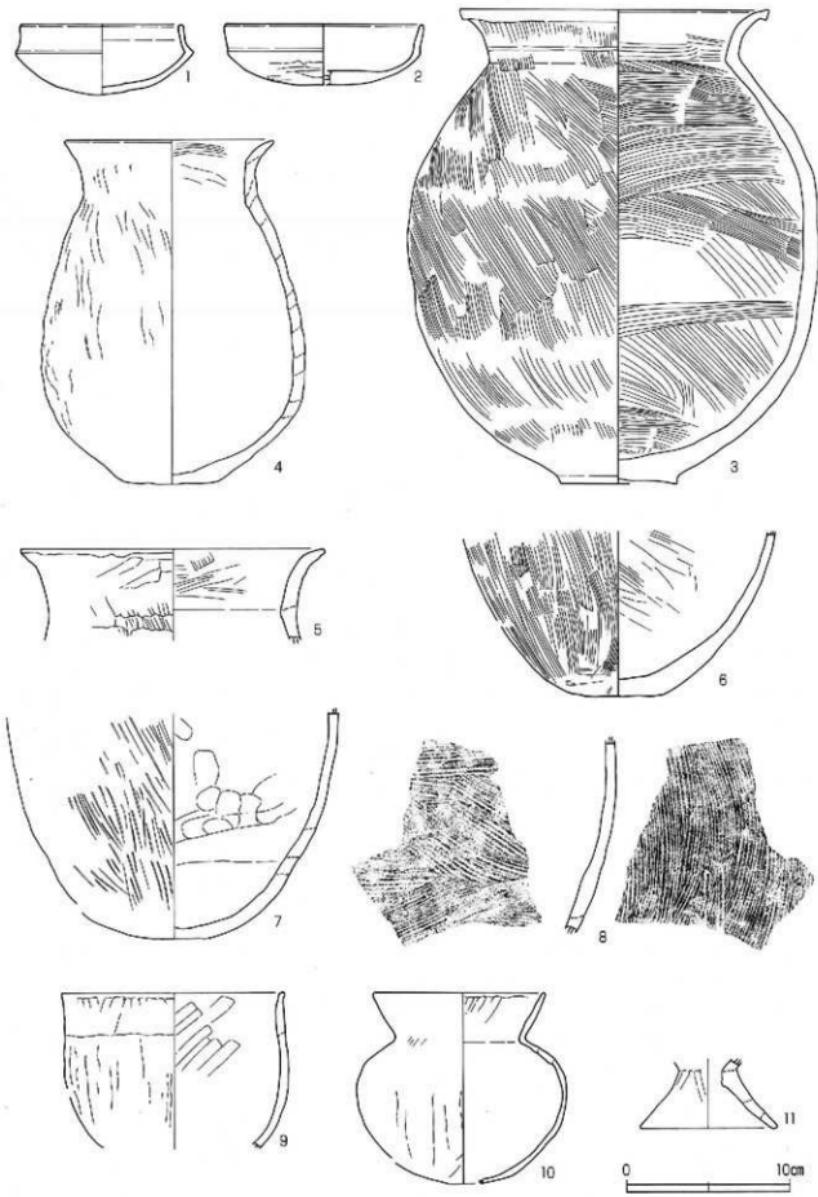


图 21 5 号住出土遗物



写真 10 5号住居掘状況

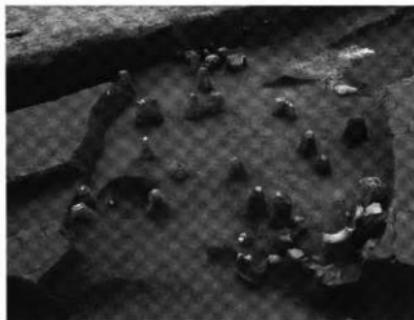


写真 11 遺物出土状況



写真 12 調査状況



写真 13 一括遺物出土状況



写真 14 一括遺物出土状況



写真 15 調査状況

6号住居址（図22～24、図版3.4）

遺構確認に際し黒色土の広がりを検出し、トレンチ調査により遺構範囲及び掘り込みを確認した。遺構の大半は調査区外に広がり、5号住と重複する。古墳時代後期の住居址である。

（規模・形状）東西3.08m、南北2.52mを検出したのみで、隅丸方形を呈するだろう。

（覆土）覆土全体に焼土・炭化物が多く混入し、下層に炭化材が多く混入していた。

（遺物出土状況）住居址全体から多くの資料が得られた。西壁際から焼土・炭化材とともに数個体が集中して出土している。カマドの支柱も抜き取られ、カマド廐棄に伴う一括遺物と考えられよう。

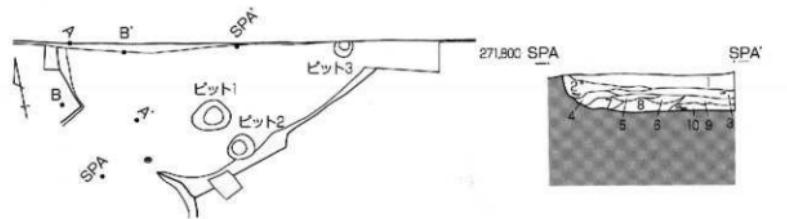
（カマド）5号住と重複するとともに、袖石なども確認できず規模など判然としないが、焼土層が堆積していたため西壁に設けていたと推定した。

（内部施設）ピットを3基確認した。ピット1は略円形を呈し、長径0.45m、短径0.37m、深さ0.26mを測る。南壁際より検出したピット2は長径0.33m、短径0.30m、深さ0.31mを測る。一部を確認したピット3は南北方向0.21m、東西方向0.24m、深さ0.13mを測る。

（出土遺物）壺・甕・壺・瓶・土製品などがある。壺は口縁部との境に稜を有し、内湾して立ち上がるるもの(1)、丸底で半球形を呈するもの(2)がある。甕・壺ともハケ・ナデにより器面整形されている。9の瓶は、4の甕と入れ子状となり検出されている。10の土製品はカマドの支柱となろう。被熱による磨耗が著しい。



写真16 6号住挖掘状況



1. 白色土層 砂粒・小礫を多く含み、焼土・炭化物が混る。固くよくしまる。
2. 第褐色土層 焼土塊が多く混り、砂粒・黄色土粒を含む。しまり粘性あり。
3. 褐色土層 焼土・炭化物を多量に含み、黄色土・灰色土粒が斑状に混る。
4. 灰色土層 焼土・炭化物を含み、砂粒が混る。しまり、粘性あり。
5. 黑土層
6. 灰色土層 焼土塊を多く含む。粘性強い。
7. 灰色土層 焼土粒・炭化物を多く含む。粘性強い。
8. 灰褐色砂質土層 焼土・炭化物を含み、灰色砂質土が斑状に混る。
9. 灰褐色土層 焼土・炭化物を含み、黄色土粒が斑状に混る。粘性ややあり。
10. 灰黑色土層 炭化物を多量に含み、灰色砂粒が斑状に混る。粘性あり。

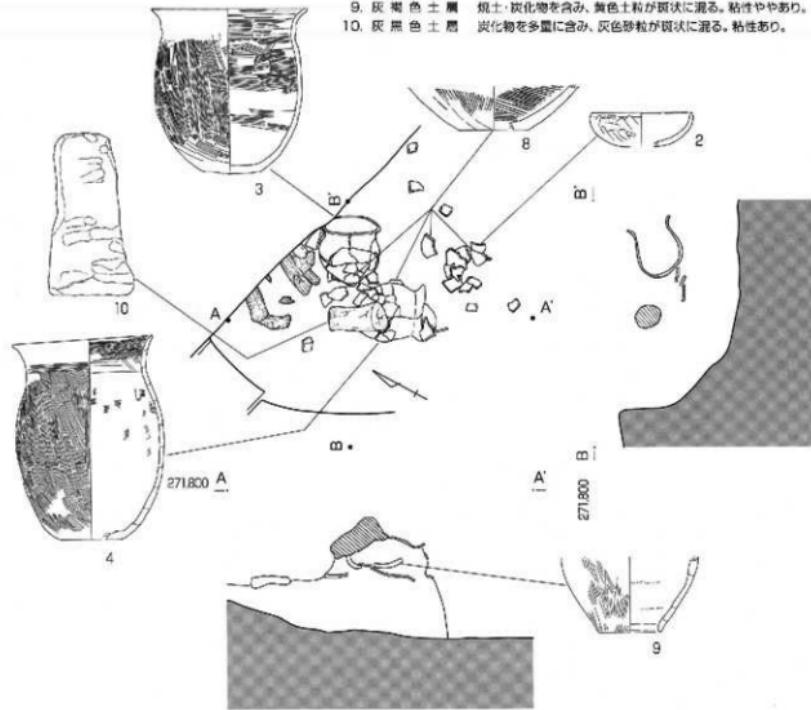


図 22 6号住実測図・出土状況（1）

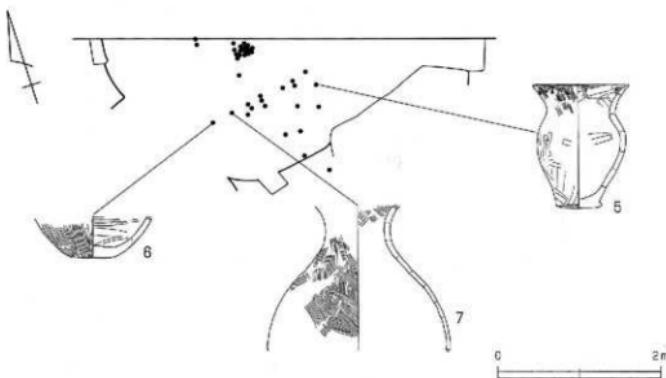


図 23 6号住遺物出土状況(2)

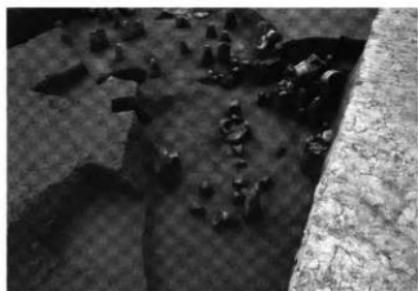


写真 17 6号住遺物出土状況



写真 18 一括遺物出土状況



写真 19 調査状況



写真 20 調査状況(2)

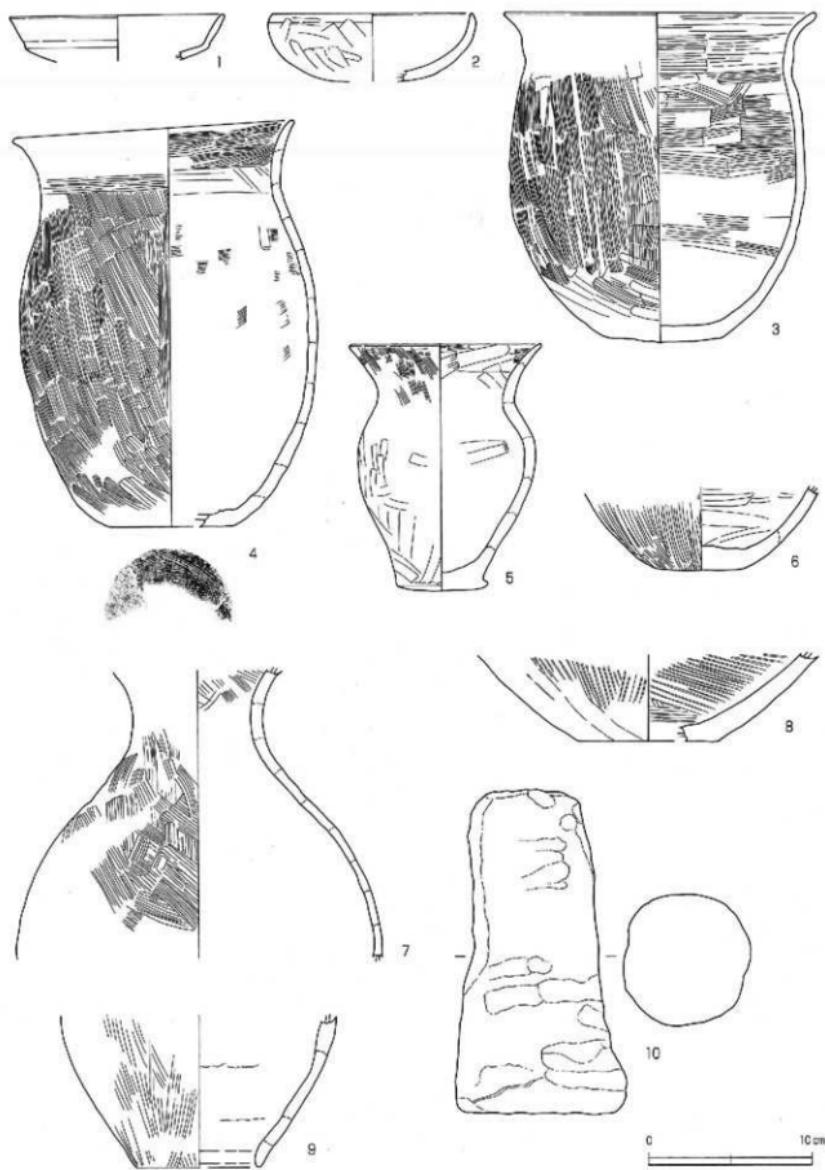


图 24 6号住出土遗物

7号住居址（図25.26、図版4）

すでに試掘で確認していたため平面プランの検出に努めた。遺構の大半は調査区外に広がる。弥生時代後期の住居址である。

（規模・形状）南北方向 2.70 m、東西方向 2.68 m 程を検出し、方形を呈するであろう。

（覆土）覆土全体に焼土・炭化物が混入するが、下層に炭化物が多く堆積していた。

（遺物出土状況）掘り下げに際し覆土中より出土した点数は少なく、散在して検出される状況であった。

（内部施設）幅 0.12 ~ 0.21 m、深さ 0.08 m ほどの周溝を確認したのみである。

（出土遺物）壺・甕のみ 8 点を図化した。壺は口縁部に 4 個 1 単位の貼付文が 4ヶ所に付き、内外赤彩されるもの(1)、有段口縁で棒状浮文が付くもの(2)、口縁部が波状を呈し、口唇部に刻み目が付くもの(3)、口縁部が大きくラッパ状に開き内外赤彩されたもの(4)がある。甕は、口縁部が「く」の字に屈曲し、口唇部に刻み目をつけ、ハケ整形されるもの(6)、口縁部から頸部にかけ櫛描波状文が施されるもの(5, 7)などがある。

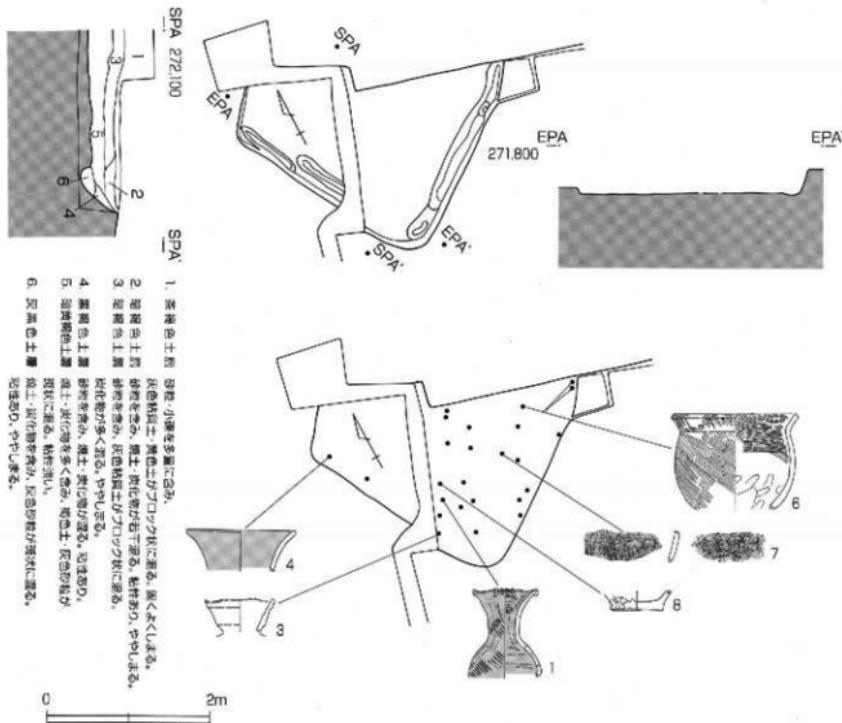


図25 7号住実測図・遺物出土状況

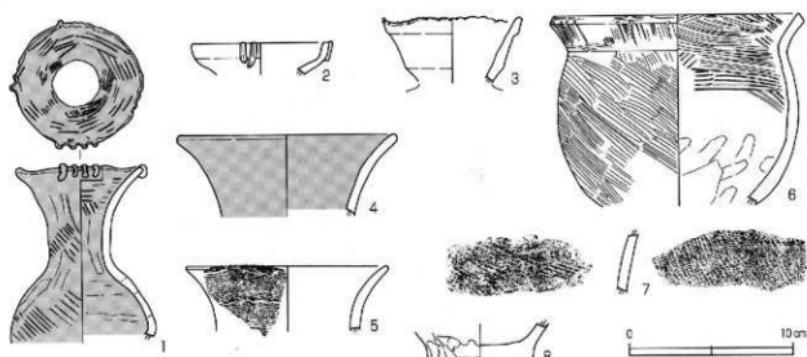


図 26 7号住出土遺物



写真 21
7号住完掘状況

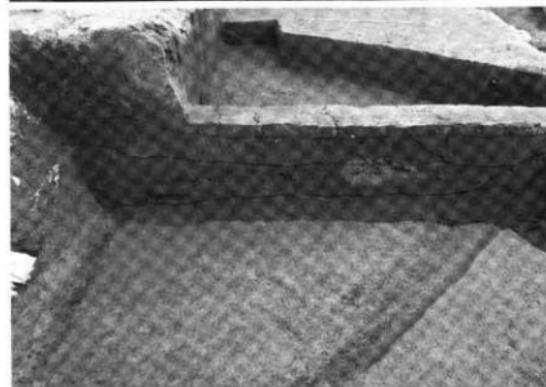


写真 22
土層堆積状況

8号住居址（図27,28、図版4）

遺構確認に際し黒色土の広がりを検出し、トレンチ調査により遺構範囲及び掘り込みを確認した。遺構の大半は調査区外に広がる。古墳時代後期の住居址である。

（規模・形状）長軸4.33m、短軸3.15m程を検出した。

（覆土）掘り込みが浅く、覆土全体に焼土粒・炭化物が混入し、部分的に焼土・炭化材が集中していた。

（遺物出土状況）掘り下げに際し覆土中より出土した点数は少なく、焼土・炭化材が集中する地点から比較的まとまって土器が検出された。

（出土遺物）1以外、2～4は住居内からまとめて出土した。1は折り返し口縁となり、胴中位に最大径をもつ壺である。外面ハケ・ナデ整形された後ミガキが施される。2は胴部以下を残すが、胴下位に最大径をもつ壺、3はハケ・ナデ整形された鉢、4はミニュチュア土器であろうか、脚台部のみ残存しハケ整形される。

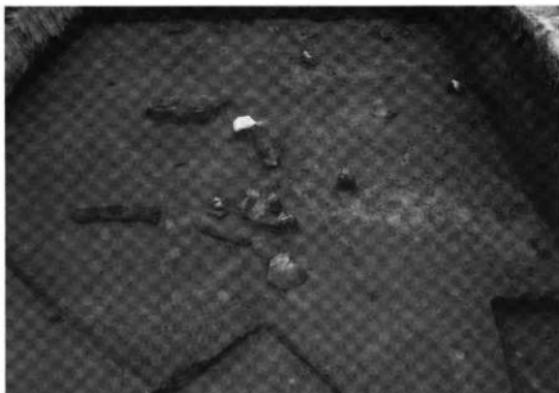


写真23
8号住遺物出土状況



写真24
調査状況

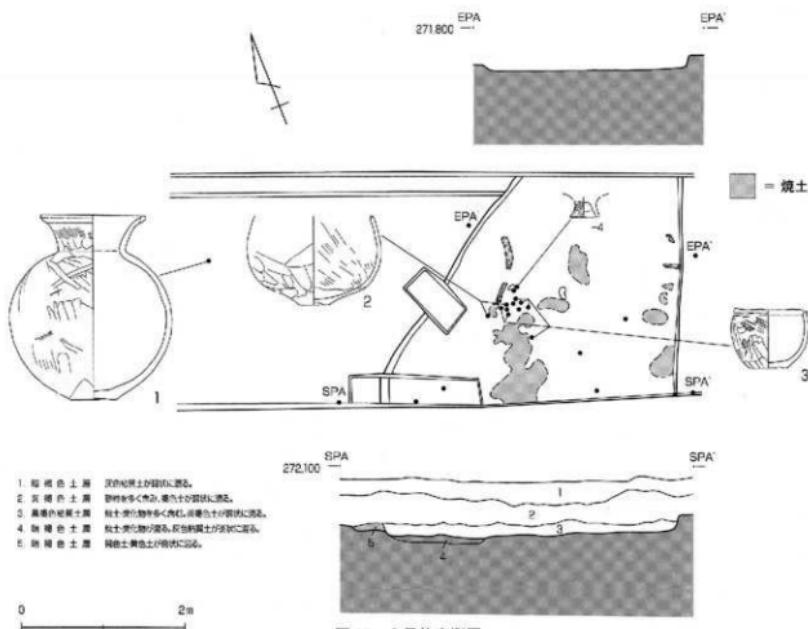


図 27 8号住実測図

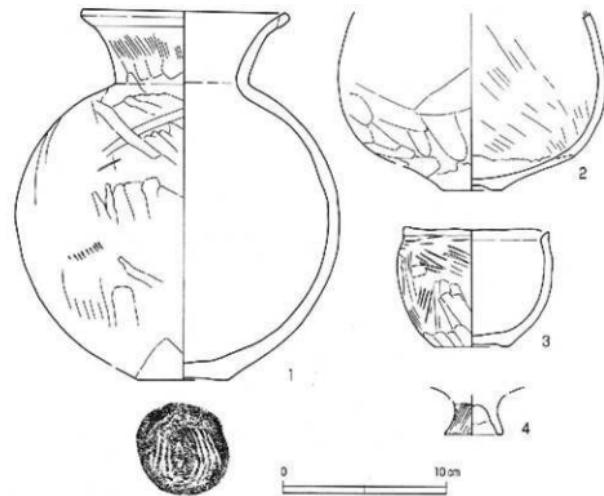


図 28 8号住出土遺物

第2節 溝状遺構

1号溝（図29.30）

調査区西側から東流するようである。調査期間中、湧水が絶えず溝底まで掘り下げるのは不可能であった。幅6.40～7.60m、深さ1m以上となり、覆土は砂礫と砂層の互層であった。出土遺物の多くが破片資料であり、1は隆帯文が施された縄文土器であろう。2以下は古墳時代後期に属す須恵器甌、土師器壺・高壺・甕である。2の須恵器甌は口縁部と底部を欠き、胴部のみである。胴中位に波状文が巡り、注口は破損する。3～5の壺は底部と口縁部との境に稜を有し、口縁部が直線的に立ち上がるもの(3)、須恵器壺身を模倣し口縁部が内折するもの(4)、丸底で半球形を呈するもの(5)がある。6～9の高壺は6のみ壺部形体が判明し、体部下位に強い稜をもち、逆台形状を呈す。脚部はいずれもハの字状に開く器形であるが、9のみ接合部が筒状の形体を呈する。外面亦彩され、壺部内面は黒色処理されている。10～13は甕胴部及び底部片となる。

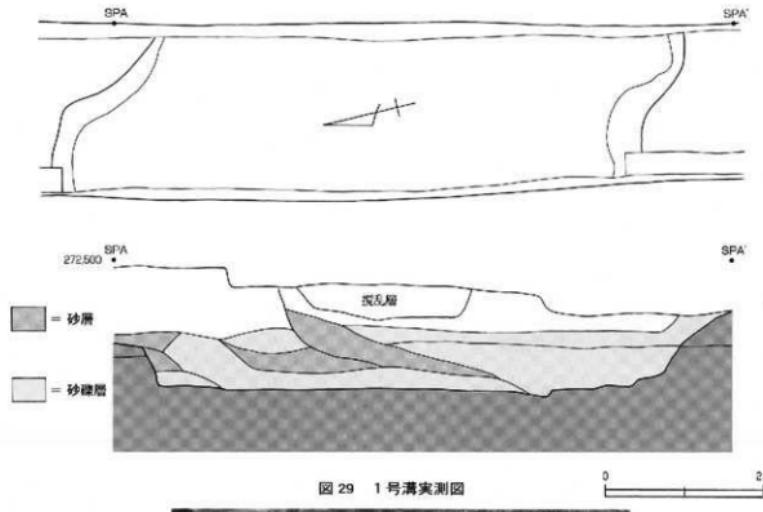


図29 1号溝実測図



写真25 1号溝土層堆積

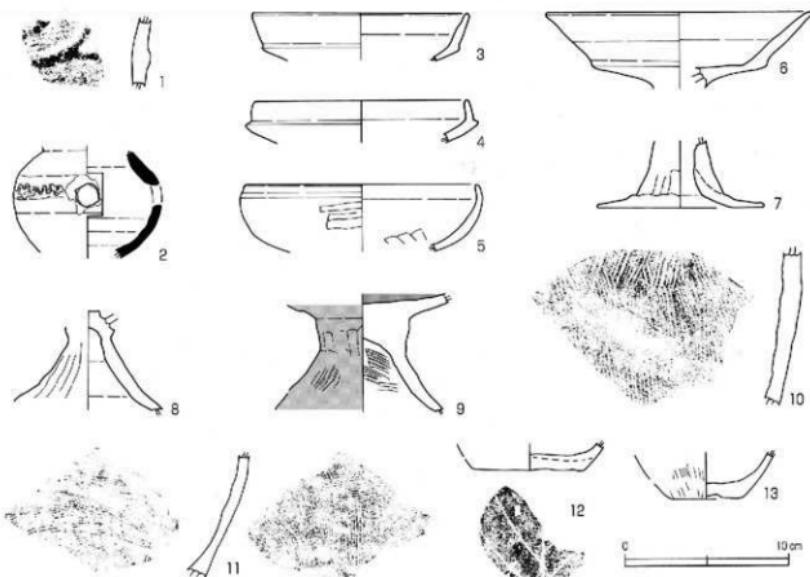


图 30 1号沟出土遗物

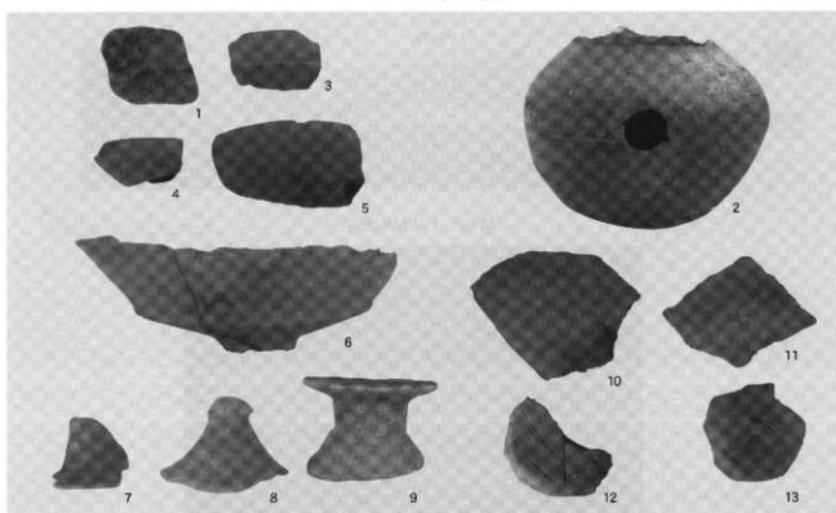


写真 26 1号沟出土遗物

2号溝(図31.32)

調査区北側から検出し、やや湾曲しつつ南流するようである。時期は弥生時代後期であろう。幅0.75～1.35m、深さ0.40～0.46mを測り、断面U字状を呈する。覆土中に砂礫層が10cmほど堆積しており水の流れがあったことを裏付ける。出土遺物は7点図化した。1～5は弥生時代後期、6,7は時間的に幅をもたせ弥生時代後期から古墳時代初頭までの所産であろう。1は遺構外からの出土であるがここで取り上げた。口縁部を欠く壺であり、頸部に平行弦線を巡らしている。内面口縁部及び頸部以外、外面は赤彩されている。2は略完形の壺で、内外ハケ整形され、口縁部が「く」の字状に屈曲する。3～5の口縁部片は、口唇部に刻みを施した壺であろう。ハケ調整されたもの(3,4)、波長がくずれた波状文が施文されるもの(5)がある。6,7いずれもハケ調整された壺の胴部・底部片である。

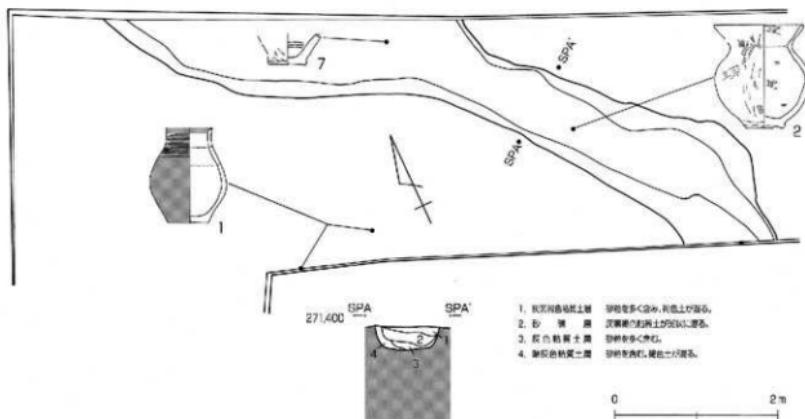


図31 2号溝実測図



写真27 2号溝完掘状況



写真28 調査状況

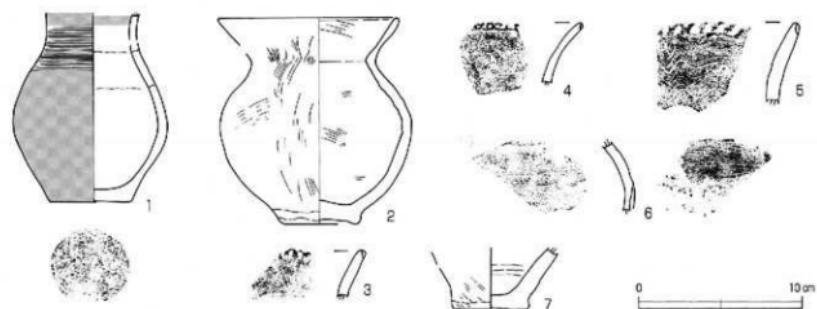


図 32 2号溝出土遺物

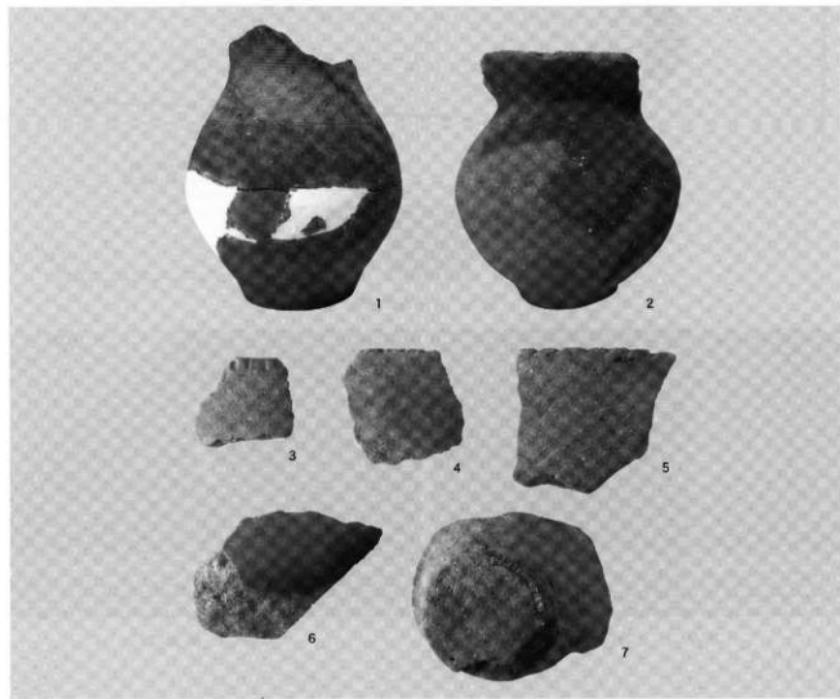


写真 29 2号溝出土遺物

第3節 埋壺遺構(図33,34、図版5)

調査区西側から2基隣接して検出した。掘り込みはどちらも10cm程度確認しただけで、同一固体の壺上半と下半を約30cm離し、それぞれ個々に埋設したものであろう。壺上半は逆位に、下半は正位に据えてあった。他に出土遺物はなく、口縁部が横ナデされ、内外面ハケ・ナデ整形された古墳時代後期の壺である。

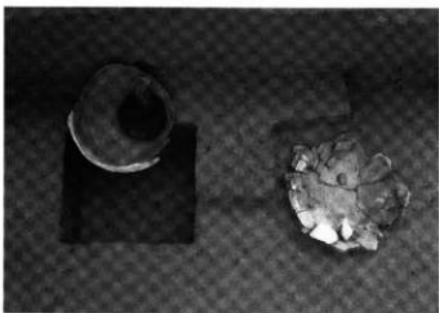


写真30 検出状況

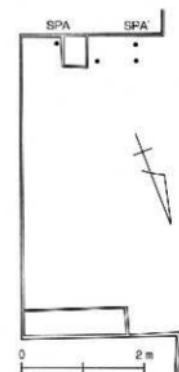
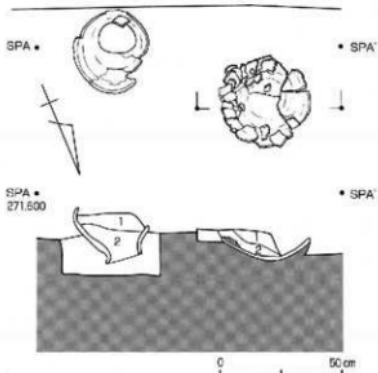


図33 埋壺検出状況

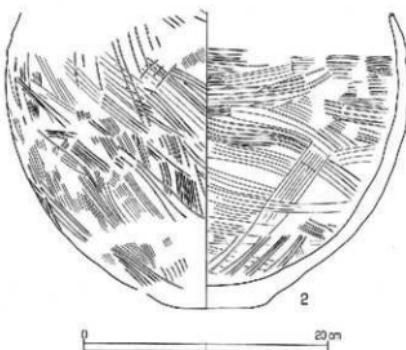
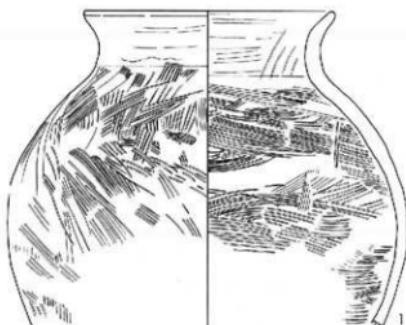


図34 埋壺出土遺物

第4節 土坑 (図35,36、図版5)

3, 5号住居址に近接する。平面円形を呈し、南北0.36m、東西0.37m、深さ0.22mの規模を有し、断面鍋底状となる。出土遺物は少なく、土坑周辺から出土した2点を図化した。いずれも古墳時代後期の壺である。

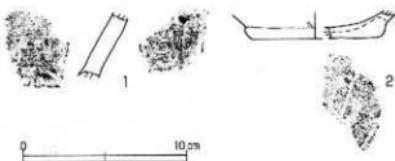


図35 土坑出土遺物

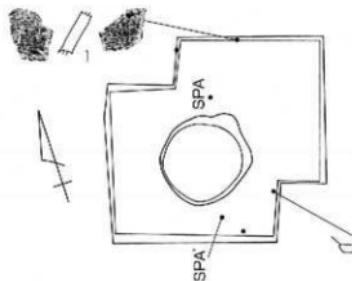


図36 土坑実測図

271.500 SPA SPA'



1. 灰色粘質土層 塚土・炭化粒を含み、黄褐色土が混る。
2. 梅色砂層 灰色土・黒色土粒が混る。
3. 暗褐色粘質土層 燐土・炭化物が混り、砂粒を多く含む。粘性強い。
4. 灰黄色土層 砂粒を多く含む。黒色土・黄白色土粒が混る。

0 50cm



写真31 土層堆積状況



写真32 調査状況

第5節 遺構外出土遺物 (図37、図版5)

遺構に伴わないものを取り上げる。1は古墳時代初頭の二重口縁壺の口縁部であろう。2は丸底で口縁部との境に稜を有する古墳時代後期の壺である。内外面赤彩されている。3は古墳時代後期の所産で、筒状の脚部を呈し、裾部がハの字に広がる高壺である。

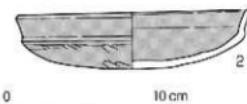
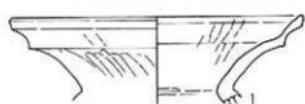


図37 遺構外出土遺物

第4章 まとめ

今回の調査で確認された遺構は、弥生時代後期の竪穴住居址1棟・溝状遺構1条、古墳時代後期の竪穴住居址7棟、溝状遺構1条、埋甕遺構2基、土坑1基である。出土遺物は、縄文・弥生時代の土器片の他、古墳時代後期の土師器・須恵器・上製品・石器などがある。遺構とともに多様な遺物を確認し、縄文・弥生時代から古墳時代にわたる複合遺跡となる。

縄文時代は、僅かに土器片が出土したのみで、遺構は確認されなかった。遺物の出土は、その時代の人間活動の証拠となるもので、貴重な発見であった。

弥生時代後期では、7号住居址・2号溝を確認した。口縁端部に刻みを有し、口縁部から頸部にかけ梯描波状文が施される甕や内外面赤彩されるとともに、口縁部が大きくラッパ状に開き、頸部に平行沈線を巡らす壺など木遺跡から出土した当該期の土器系譜は、いわゆる中部高地系上器群が優勢を占めている。住居址焼土に焼土・炭化物が多く混じり、特に下層に炭化物が集中する状況は焼失家屋と推定できる。こうした焼失家屋の多さは当該期の大きな特徴の一つと指摘されており、木遺跡からも時代的な事象を確認することができた。遺構の一部を検出しただけであるが、当該期の人間活動を確認するとともに、盆地低地での事例を得ることができ大きな成果であった。

今回の調査では、検出遺構・川土遺物の大部分が古墳時代後期に属し、当該調査の中心をなしている。住居址の規模・形態は一辺4~5m程の方形となり、壁際にカマドを設けている。カマドを確認したのが3.5.6号住居址の3棟であり、そのうち5.6号住は焼土が集中する状況からその位置を推定したが、形状・構築状況などは他遺構との重複あるいはカマド廃絶に伴う祭祀行為などにより判然としない。唯一規模が判明する3号住カマドは、長軸1.02m、短軸0.71m程の規模となり袖石・支柱石などは確認できず、構築材と推定される径10cm程の小礫が多数集中していた。

出土土器の多半は6世紀第4四半世紀~7世紀第1四半世紀に比定でき、検出住居に重複が見られるためこの間、二、三度の建て替えを繰り返しつつ集落が営まれ続けたと推量できる。今後の調査の積み重ねにより当時の実像がより鮮明となるであろう。

おわりに

検出数・出土量の多寡はあるが、検出遺構及び出土遺物はそれぞれ当該時期の人間活動を明らかにする重要な発見であった。本報告は限られた時間の中でまとめたものであり、遺構と出土遺物を中心に資料化に努め、表示した。調査の成果と資料の詳細な検討・考察が行われず不十分な点は否めないが、本書が今後の調査・研究に少しでも資することが出来れば幸いである。

遺物観察表(1) ()は後元値

図 No.	出土位置	種類・備考	法基(cm)			所持	観察所見(測定・文様・時代・その他)	助七	備考
			口径	高さ	底盤				
2 1	試掘坑 2	土器 磁				腹部	動物平行沈線、内面ハケ、内外面赤彩、弥生後期	密	
2 2	試掘坑 2	土器器 麦				頸部	外面ハケ、内面ナデ	密	
2 3	試掘坑 3	土器 席				上腹部	折り返し口縁、口唇斜削小目、弥生後期	密	
2 4	試掘坑 3	土器 容				上腹部	折り返し口縁、弥生後期	密	
2 5	試掘坑 3	土器 容				口縁部	外腹側施伏状、弥生後期		
2 6	試掘坑 3	土器器 麦				胸部	内外面ハケ	やや粗	
2 7	試掘坑 3	土器器 麦	径高 2.2	(4.8)		底部	内外面ハケ・ナデ	密	
2 8	試掘坑 3	土器器 麦	径高 3.5	(10.0)		底部	外腹ハケ・ナデ	やや粗	
2 9	試掘坑 3	土器器 春	径高 2.3	(8.8)		底部	内外面ナデ	やや粗	
9 1	1号住	土器器 坯	(14.0)	3.8		口縁～底部	外腹子持ちハラケズリ、内面ナデ、武器手持ちハラケズリ 古墳後期	密	
9 2	1号住	土器器 坯	(14.0)	(2.7)		口縁～底部	外曲口腰沿ナデ・体部手持ちハラケズリ、内面ナデ、古墳後期	密	
9 3	1号住	土器器 東	(15.0)	残高 5.0		口縁部	内外面ナデ	密	
9 4	1号住	土器器 東	残高 7.6			腹部～脚部	外腹ハケ、内面ハケ・ナデ	やや粗	
9 5	1号住	土器器 東	残高 2.0	6.4		底部	外腹ハケ、内面ハケ・ナデ、表部ナデ	密	
9 6	1号住	土器器 東	残高 2.7	(8.6)		底部	外腹ナデ・ハケ、内面ハケ、武器ナデ	密	
9 7	1号住	土器器 高环	残高 2.0			环部	外腹ハケ便ナデ、内面ハケ	密	
9 8	1号住	土器器 高环				胸部	外腹ハケ	密	
9 9	1号住	石器 磨石	長 18.0、幅 7.2、厚 2.9				表面 4 面、石材=安山岩、重量 656 g		
10 1	2号住	土器器 坯	12.1	4.7		変形	外腹子持ちハラケズリ後ミガキ、内面ナデ後ミガキ 内外面リール付帯、内面黑色施彩、古墳後期		
10 2	2号住	土器器 高环	残高 6.2	10.7		底部	外腹ハラケズリ・クロコナデ、内面ナデ、古墳後期		
10 3	2号住	土器器 坯	(16.2)	10.5	8.0	口縁～底部	外腹ハラケズリ後ナデ、内面ナデ・輪積み底、古墳後期		
10 4	2号住	石器 磨石	長 10.8、幅 10.6、厚 7.4				磨面 2 面、石材=安山岩、重量 1109 g		
15 1	3号住	深腹器 坯	(16.2)	残高 2.5		U縫部～体部	内外面ワクリナデ	密	
15 2	3号住	十脚器 坯	(12.8)	3.9		口縁～底部	外腹子持ちハラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15 3	3号住	十脚器 坯	(12.0)	3.2		口縁～底部	外腹子持ちハラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15 4	3号住	土器器 坯	12.1	8.9		口縁～底部	外曲子持ちハラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15 5	3号住	土器器 坯	(12.0)	4.0		口縁～底部	外曲子持ちハラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15 6	3号住	土器器 坯	(10.0)	2.8		口縁～底部	外腹子持ちハラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15 7	3号住	土器器 東	(18.0)	残高 6.1		U縫部	外腹子持ちハラケズリ・脚部ケズリ、内面ハカ後ナデ 古墳後期	密	
15 8	3号住	土器器 東	残高 3.7	(6.8)		底部	内外面ナデ	密	
15 9	3号住力マド	土器器 坯	15.3	5.9		変形	外腹子持ちハラケズリ・口縫部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15 10	3号住力マド	土器器 坯	(13.0)	4.5		口縁～底部	外腹子持ちハラケズリ・口縫部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15 11	3号住力マド	土器器 坯	12.6	3.5		口縁～底部	外腹子持ちハラケズリ・口縫部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15 12	3号住力マド	土器器 坯	12.6	3.9		口縁～底部	外腹子持ちハラケズリ・口縫部横ナデ 内面ナデ後ミガキ、古墳後期	密	
15 13	3号住力マド	土器器 坯	(11.6)	4.5		口縁～底部	外曲子持ちハラケズリ後ミガキ・口縫部横ナデ 内面ナデ・ミガキ、古墳後期	密	
15 14	3号住力マド	土器器 坯	13.0	4.1		口縁～底部	外腹子持ちハラケズリ・口縫部横ナデ 内面ナデ・ミガキ、内面黑色施彩、古墳後期	密	
15 15	3号住力マド	土器器 高环	13.9	残高 3.4		底部	外腹ケズリ・ナデ・ミガキ、内面ナデ・ミガキ、内面黑色施彩 古墳後期	密	
15 16	3号住力マド	土器器 高环	(14.6)	10.5	10.0	口縁～脚部	外腹ケズリ・ナデ、内面ナデ・ミガキ、古墳後期	密	
15 17	3号住力マド	土器器 高环	16.0	10.9	11.0	動定形	外腹ケズリ・ナデ、内面ナデ・ミガキ、古墳後期	密	
15 18	3号住力マド	土器器 高环	(18.8)	9.5	(6.2)	口縁～底部	外腹ハケ後ナデ、内面ナデ・輪積み底、古墳後期	密	

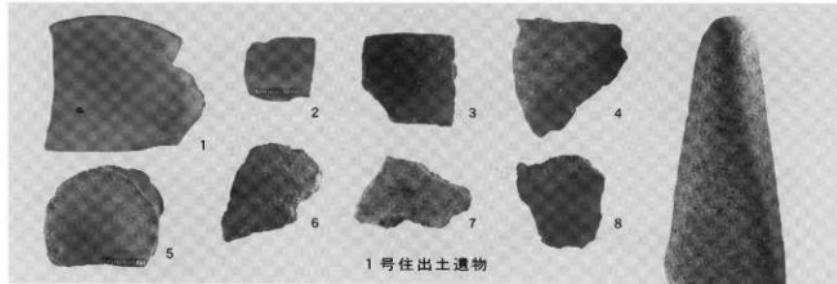
遺物観察表(2) ()は復元品

沿	No	出土位置	種類・器形	法蓋(cm)			部位	監査所見(調査・文様・時代・その他)	監査	備考
				径	縦高	底厚				
15	19	3号生カマド	土師器 豪	(18.0)	残高 17.0		口縁～底部	外側ハケ後ナガ・ケズリ、内面ハケ後ナガ・輪渦み模 古墳後期	審	
15	20	3号住カマド	土師器 豊	(16.0)	残高 7.8		口縁部	外側ハケ後ナガ、内面ハケ後ナガ、古墳後期	審	
15	21	3号生カマド	土師器 豊	(18.0)	残高 5.4		口縁部	内外面ハケ後ナガ、古墳後期	審	
15	22	3号住カマド	土師器 豊		残高 2.8	(8.0)	底部	外側ハケ・ナガ、内面ナガ、底面ナガ・吉納後期	審	
15	23	3号住カマド	土師器 岩		残高 8.5	4.0	底部～底部	外側ハケケズリ・ナガ、内面ナガ、底面ハケケズリ・ナガ 古墳後期	審	
16	24	3号住カマド	土師器 岩		残高 17.5	8.0	底部～底部	内外面ハケ後ナガ、底面ナガ、古墳後期	審	
16	25	3号住カマド	土師器 岩		残高 6.3	(6.0)	底部	外側ハケ後ナガ、内面ハケ・ナガ、古墳後期	審	
16	26	3号住	石器 磨石	長 11.2	幅 9.6	厚 4.3		磨石 2面、石材～安山岩、重量 480 g		
16	27	3号住	石器 磨石	長 28.0	幅 9.3	厚 7.1		磨石 1面、石材～安山岩、重量 1800 g		
17	1	4号住	土師器 豊		残高 2.4	(5.0)	底部	外側ハケ・ナガ、内面ハケ	審	
17	2	4号住	土師器 豊		残高 2.3	(5.0)	底部	外側ハケ、内面模様	審	
21	1	5号住	土師器 坯	(10.5)	4.6			第1形		
21	2	5号住	土師器 坯	(12.0)	4.0		口縁～底部	口縁部内外面クロコナガ、外側ケズリ、内面ナガ、古墳後期	審	
21	3	5号住	土師器 坯	18.7	29.1	7.0	光形	外側ハケ・ナガ、内面ハケ、古墳後期	審	
21	4	5号住	土師器 豊	15.6	22.7	6.0	光形	内外面ハケ・ナガ、底面ナガ、古墳後期	審	
21	5	5号住	土師器 豊	(19.0)	残高 6.0		口縁部	内外面ハケ後ナガ、古墳後期	審	
21	6	5号住	土師器 豊		残高 10.8	(6.0)	底部～底部	内外面ハケ後ナガ、底面ナガ、古墳後期	審	
21	7	5号住	土師器 豊		残高 14.8	(5.0)	底部～底部	外側ハケ、内面ナガ・複数層、底面ナガ、古墳後期	審	
21	8	5号住	土師器 豊				側部	外側ハケス、古墳後期	審	
21	9	6号住	土師器 岩	(14.0)	残高 10.8		口縁～側部	外側ハケ後ナガ、内面ナガ、古墳後期	審	
21	10	5号住	土師器 豊	(14.0)	12.6		口縁～底部	外側ナガ、内面ナガ・輪渦み模、古墳後期	審	
21	11	5号住	土師器 沢合		3.4	(8.0)	側部	内外面ナガ、古墳後期	審	
24	1	6号住	土師器 坯	(14.0)	残高 3.0		口縁～体部	口縁部内外面クロコナガ、外側底部ケズリ、内面ナガ、古墳後期	やや 難	
24	2	6号住	土師器 坯	(13.0)	4.5		口縁～底部	口縁部内外面クロコナガ、外側底部ケズリ、内面ナガ、古墳後期	審	
24	3	6号住	土師器 岩	20.2	21.6	7.5	光形	外面模様有、内外面ハケ後ナガ、古墳後期	審	
24	4	6号住	土師器 岩	18.0	26.8	8.0	光形	内外面ハケ・ナガ、古墳後期	審	
24	5	6号住	土師器 岩	12.3	16.2	5.9	光形	内外面ハケ後ナガ・ナガ、古墳後期	審	
24	6	6号住	土師器 岩		残高 3.6	5.6	底部	外側ハケメ、内面ハケ後ナガ、底面ナガ、古墳後期	審	
24	7	6号住	土師器 岩		残高 19.0		側部～側部	内外面ハケ後ナガ、古墳後期	審	
24	8	6号住	土師器 岩		残高 3.6	(9.0)	底部	外側ハケ・ケズリ、内面ハケ、古墳後期	審	
24	9	6号住	土師器 岩		残高 10.0	8.0	底部～底部	外側ハケ、内面ナガ・複数層、底面ナガ、古墳後期	審	
24	10	6号住	土師器 定石	長 31.4、最大幅 11.2				ナガ・複数層、底面	審	
26	1	7号住	土器 壺	8.1	残高 11.7		口縁～側部	口縁部内外面凹凸・粘付文・縫合文・セット・単板、外側ハケ後ナガ・内 面ハケメ、共生後期	審	
26	2	7号住	土器 壺	(9.0)	残高 2.1		側部	複数層又シ粘付文、内外面ナガ・共生後期	審	
26	3	7号住	土器 壺	(8.6)	残高 4.3		口縁部	内外面ナガ・口齊部分有・共生後期	審	
26	4	7号住	土器 壺	(14.0)	残高 5.4		口縁部	内外面ナガ・赤彩・共生後期	やや 難	
26	5	7号住	土器 壺	(18.0)	残高 4.3		口縁部	外側模様波状文、内面ナガ・共生後期	審	
26	6	7号住	土器 壺	(16.0)	残高 12.6		口縁～底部	口縁部模様有・外側ハケメ・内面口縁部ハケメ・脚部ナガ・共生後期	審	
26	7	7号住	土器 壺				側部	外側模様波状文、内面ハケ・共生後期	審	
26	8	7号住	土器 壺		残高 2.5	6.8	底部	内外面ナガ	審	

遺物観察表(3) ()は復元値

回	No	出土位置	種類・量形	法長(cm)			部位	観察所見(摘要・文様・時代・その他の)	出土	備考
				口径	脚高	底径				
28	1	8号住	土器 罐	13.2	24.1	3.9	尖形	折り返し口、外側ハケ・ナゲ模様、内面ナゲ、弥生後期	南	
28	2	8号住	土器 罐	飛高 11.7	4.0		輪形	外側ナゲ、内面ウカラニ、輪形模様	南	
28	3	8号住	土器 罐	9.5	7.9	4.7	尖形	外側ハケ・ナゲ、内面ナゲ、底部少子	南	
28	4	8号住	ミニチュア土器	飛高 2.6	3.8		輪台部	外側ハケ、内面ナゲ、輪形底	否	
30	1	1号房	縁文土器 深鉢				網部	隆起文	密	
30	2	1号溝	縁文器 瓶		残高 7.5		網部	輪形穿孔 1ヶ、外側擦痕状紋、内外面ロクロナゲ	密	
30	3	1号溝	土器 罐	(13.0)	残高 2.9		口縁部	内外面ナゲ、古墳後期	南	
30	4	1号溝	土器 罐	(14.0)	残高 2.6		口縁部	内外面ナゲ、古墳後期	密	
30	5	1号房	土器 罐	(14.0)	残高 4.1		口縁部	内外面ウカラニ、占塲後期	官	
30	6	1号房	土器 罐	(16.0)	残高 4.7		外縁	内外面ロクロナゲ、古墳中晩~後期	南	
30	7	1号溝	土器 罐		残高 4.1	(19.0)	脚部	外側ヘラケズリ、内面ナゲ、古墳後期	南	
30	8	1号溝	土器 罐		残高 6.1		脚部	外側ヘラナゲ、内面ナゲ	南	
30	9	1号溝	土器 罐		残高 7.2		脚部	外側内面黒色危険、外面ヘラナゲ・ハケ・素彩、脚部内面ハケ	密	
30	10	1号溝	土器 瓶				脚部	内外面ハケメ、古墳後期	密	
30	11	1号溝	土器 瓶				脚部	内外面ハケメ、古墳後期	密	
30	12	1号房	土器 罐		残高 2.9	(1.6)	底部	外側ハラナゲ・ナゲ、内面ナゲ	密	
30	13	1号房	土器 罐		残高 1.5	(7.2)	底部	内外面ナゲ、底部木製底	南	
32	1	2号溝	土器 罐		残高 12.1	5.3	頭部~底部	頭部ハラケ、外側ハケ模様、内面ハケ模様、内面ナゲ、輪形模様	南	
32	2	2号溝	土器 罐	9.6	12.7	4.1	筋文形	内外面ハケ・ナゲ、弥生後期	南	
32	3	2号溝	土器 罐		残高 7.8		口縁部	口縁部斜め口、内外面ハケ、弥生後期	密	
32	4	2号溝	土器 瓶		残高 3.8		口縁部	口縁部斜め口、内面ハケ、弥生後期	密	
32	5	2号溝	土器 瓶		残高 3.0		口縁部	口縁部斜め口、新前新銅鏡状紋、内面ナゲ、弥生後期	正	
32	6	2号溝	土器 瓶				脚部	内外面ハケメ	密	
32	7	2号溝	土器 瓶		残高 4.5	3.4	脚部	ハケナゲ	南	
34	1	埋甕	土器 罐	20.3	残高 26.0		口縫~側部	口縫部横ナゲ、内外面ハケ後ナゲ	米	2と同一 個体
34	2	埋甕	土器 罐		残高 24.1	8.9	側部~底部	内外面ハケ後ナゲ	否	1と同一 個体
35	1	上坑1	土器 瓶				脚部	外側ハケ・ナゲ、内面ナゲ	南	
35	2	上坑1	土器 瓶		残高 1.6	(7.5)	底部	内外面ハケ・ナゲ、底部木製底	南	
37	1	調査区 振	土器 罐	(17.6)	残高 5.3		口縁部	内外面ハラナゲ・ロクロナゲ、古墳初期	密	
37	2	調査区 振	土器 罐	14.0	3.6		筋文形	内外面素彩、外側手打ちハラケズリ・ナゲ模様、内面ナゲ後ナゲ、古墳後期	會	
37	3	調査区 振	土器 罐		残高 8.4		脚部	内外面ハラナゲ、古墳後期	否	

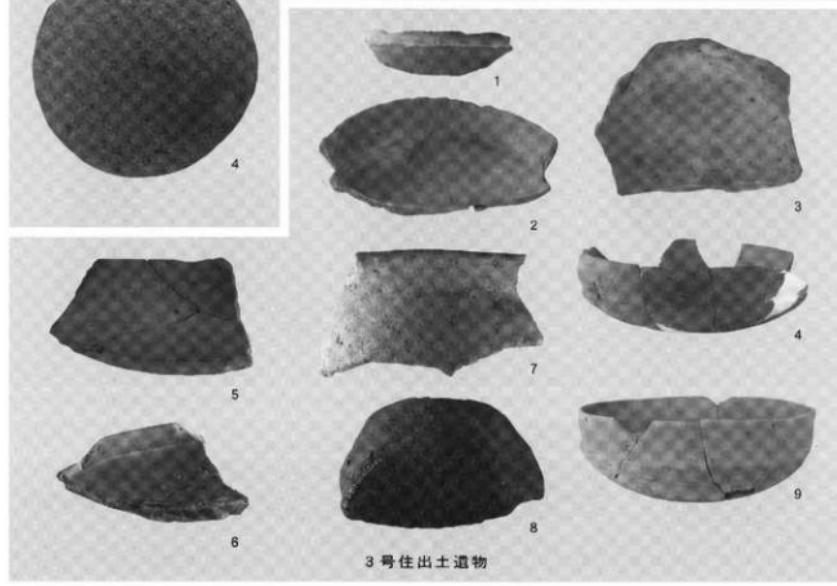
図版 1



1号住出土遺物

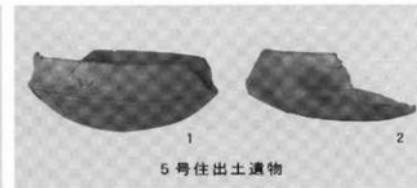
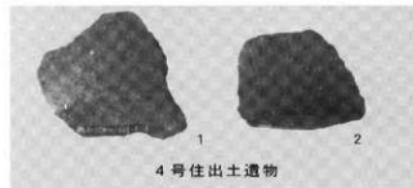
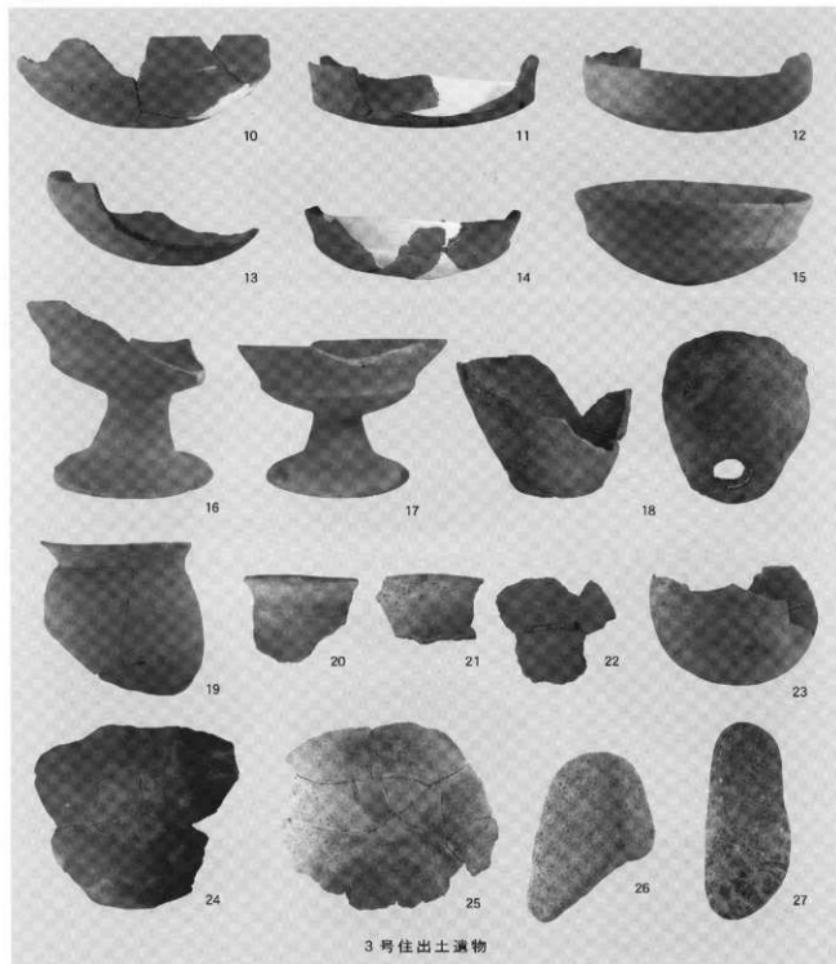


2号住出土遺物

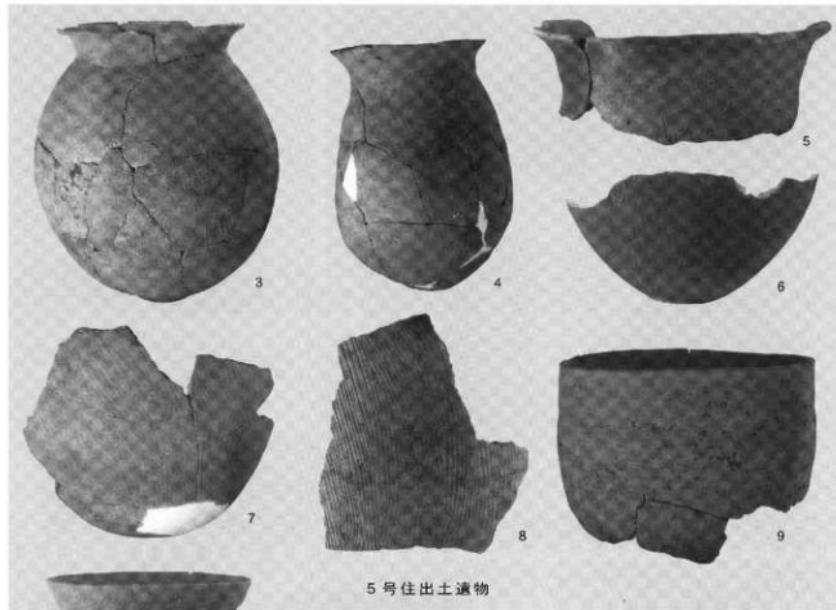


3号住出土遺物

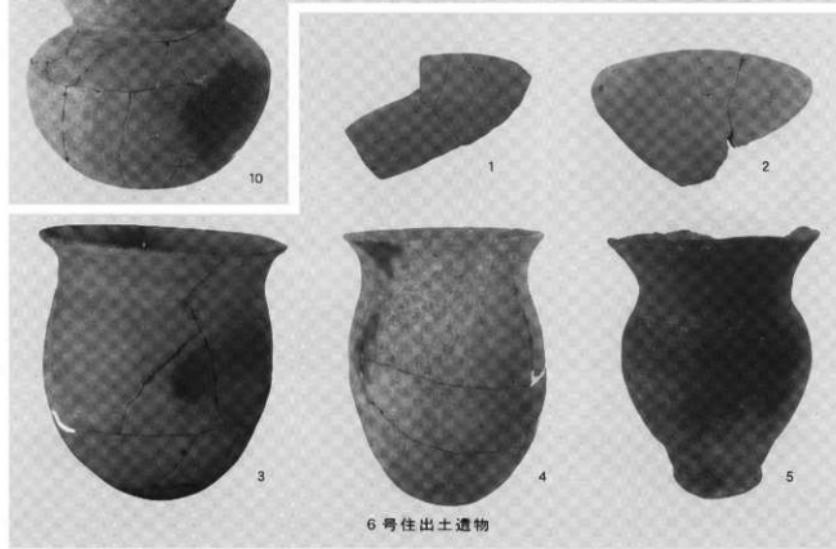
图版 2



図版 3

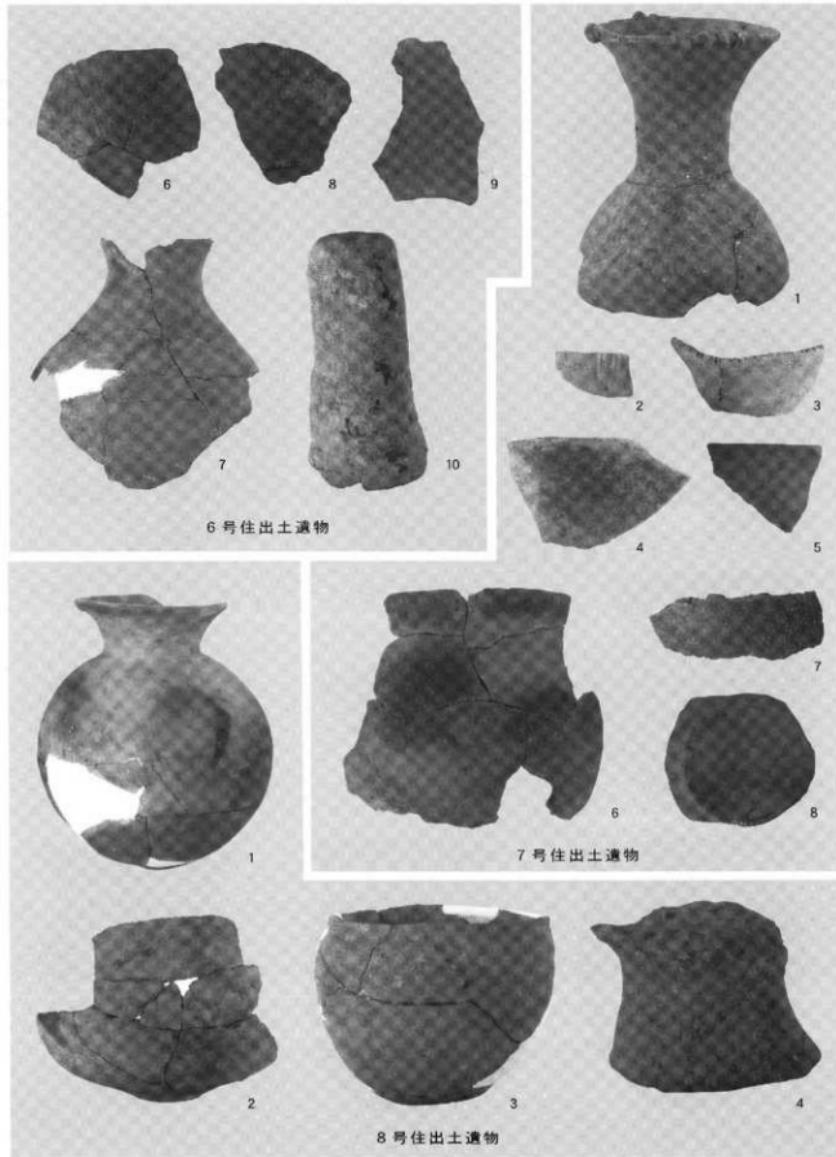


5号住出土遺物

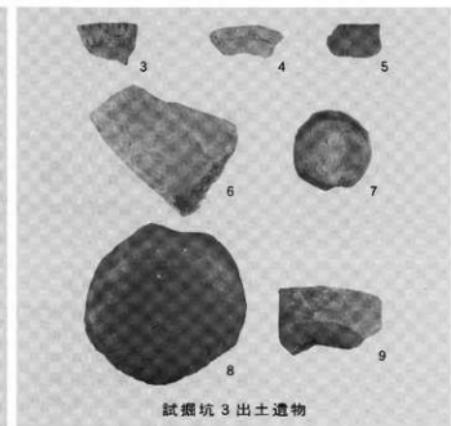
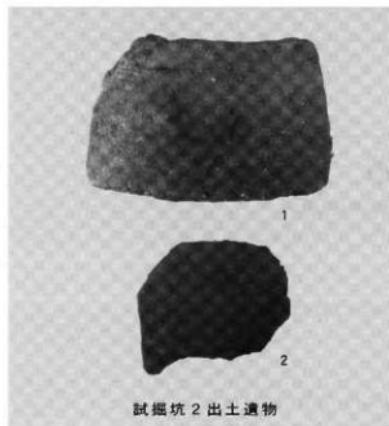
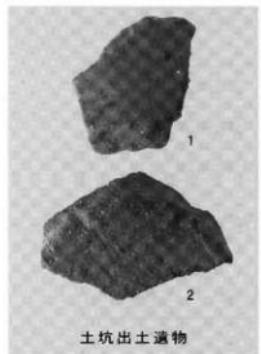
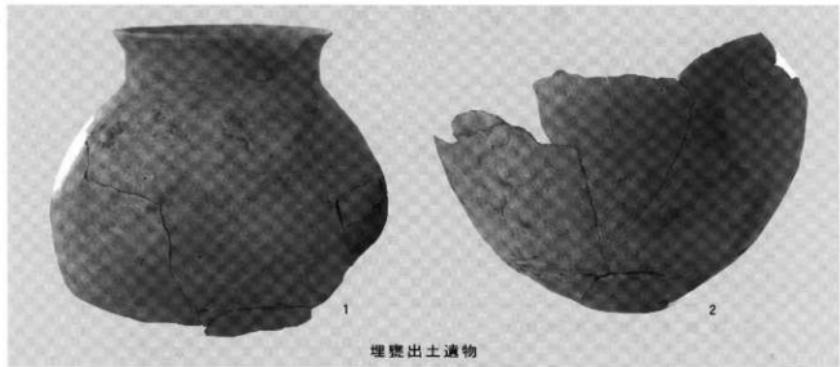


6号住出土遺物

图版 4



図版 5



報告書抄録

ふりがな	しおべいせき						
書名	塩部遺跡						
副書名	店舗建設に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	甲府市文化財調査報告						
シリーズ番号	44						
編集機関	甲府市教育委員会						
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号 電話 055(223)7324						
発行年月日	平成21年3月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
塩部遺跡	山梨県甲府市 飯田一丁目 2249-1, 2288	19201	43	35° 40'	138° 33'	H20.9.26 ~ H20.11.7	店舗建設
				49"	45"	156m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
塩部遺跡	包蔵地	弥生～平安	住居址・溝・ ピット	弥生土器・土師器・石製品			

甲府市文化財調査報告 44

塩部遺跡

—店舗建設に伴う発掘調査報告書—

平成21年3月27日

発行 甲府市教育委員会

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号

TEL 055 (223) 7324

FAX 055 (226) 4889

印刷 株式会社嶽南堂印刷所

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内一丁目10番1号

